

【研究論文】

魔または聖なる時空としてのタツミ

—愛媛県新宮村における新仏の正月の事例（タツの夕方から墓へ行く直前までの詳細）から

近藤 直也

一 はじめに

前号『徳島地域文化研究』一で、『死人の正月』の発見」と題する拙稿を本誌に投稿したが、その後検討を重ねた結果、「死人の正月」では所謂タツミやミウマを指す「仏の正月」を正確に把握し得ない欠陥がある事に気付いた。投稿後、四国各地の「仏の正月」の聞き取り調査を重ねる中で、死後四九日未満（ミツキゴシの場合は三五日未満）でタツミやミウマを迎えた場合、未だ仏になり切っていないため、一年後に延期するという伝承に幾度も出逢ったのである。現場では、四九日未満か否かが極めて大きな意味を持ち、これに満たない場合は一年延期していた。この状況を考慮せず「死人の正月」と言ってしまうと、死後四九日未満の死者霊も行事の対象に含まれてしまうのである。

「仏の正月」では、小正月前後に行なわれる「念仏の口明け」や「鉦起し」との混同を招きやすい。このため「死人の正月」を分析概念として採用したい旨を前号で述べたが、以上の理由で修正したい。「新仏」と言えば、

盆行事的色彩が強く、最適な名称ではない。だが、「一回性」が少しでも強調できる「新仏の正月」を暫定的に分析概念として採用しておきたい。

さて、前稿ではタツミの名称やその行事の意味、更に門松やシメ縄など墓前の設備に注目して考察を加えたが、これは全体のアウトラインを浮き彫りにする意図の下に記されたものである。本稿では、これを足掛かりとして、愈々その具体的な行事内容、特に来客の詳細からタツの晩の過ごし方までの一連の事柄に焦点を当てながら、新仏の正月に対するより深い部分での解釈を試みる予定である。

二 タツミに集まる人々

新宮村では、殆どの場合一二月最初のタツミに新仏の正月を行なうが、タツミの家に集まる人々は、その年の葬式に参加すれば初盆や灯籠流しと同じく、一二月の最初のタツミは新仏の正月があるものとして年間の行事

予定表の中に組み込んでいるため、タツミの家から案内が無くても押し掛けてでも行くものであった。また、訪ねる側は過去の交際記録を繕き、タツミの家との人や物・金の交流の有無を確認し、オツツミ（お金を紙に包み黒と白のミズヒキをかけたもの）の額を時の相場に換算し直して持参する。このため、案内など全く必要なく、阿吽の呼吸でタツミの参加人数はほぼ決まってしまう。家の都合により、急速一二月の二回目のタツミに日を変更する場合のみ案内を出す、案内が無ければ最初のタツミに集まるという事がここでは常識になっていた。

さて、タツミに集まる人々は、聞き取り調査に回った全二八地区総てで確認することができた。これを纏めたものが表1である。総ての事例に共通するのは親戚の存在である。やはり、新仏のための正月であるから、肉親とそれを取り巻く親戚は是非とも立ち会わなければならなかった事がわかる。しかし、1の天日では「遠方における親戚は来んが、近くの親戚が来る」と言い、葬式の如く親戚なら全て参加しなければならぬという程の重いものではなかった。恐らく、県外の遠方へ働きに出ている親戚に、新仏の正月のために帰って貰うのは心苦しいという思いがこのような伝承を生んだのであろう。その一方で、血縁は無いが生前「親しく付き合っていた近所の衆」は集まってくれる。血縁だけでなく、地縁もある程度重要な意味を持っていた事がわかる。

19の秋田では、親戚だけでなく「近所でもつきあいのある人はたいいてい来る」と言う。また、「家の人と親戚の人だけでやる行事。坊さんは来ない。念仏はしない」と言う家もある。家によっても偏差があり、「一般的に血縁を重視する傾向が強い。26の大影では、「親戚・近所」の他に「濃い親戚の者」という限定があった。また、28の日浦でも「親戚や近所の人」の他に「薄い親戚は来ん」と言う。これらの言及の中にも、血縁がほとんど紋じり

表1 タツミに集まる人々

事例番号	地区	タツミに集まる人々
1	天日	遠方における親戚は来んが、近くの親戚が来る。親しくつきあっていた近所の衆が集まってくる。
2	鳩岡	親戚、近所
3	木嵐	親戚の人々
4	泉田	親戚や近所の人々
5	嵯峨野	親戚、近所
6	中野	親戚
7	中村	親戚
8	中上	親戚
9	田之内	親戚、近所
10	内野	親戚
11	大窪	親戚、近所の人でも好意にしていた人は来た。
12	寺尾	親戚、近所
13	西ヶ市	親戚
14	青山	親戚、近所
15	黒田	親戚
16	久保ヶ内	親戚、近所
17	土居	親戚、近所といってもずっと離れている近所ではなく、本当に近い近所の人だけが来る。
18	鶴野	親戚、近所
19	秋田	親戚、近所でもつきあいのある人はたいいてい来る。家の人と親戚の人だけでやる行事。坊さんは来ない。念仏はしない。
20	下り付	親戚
21	総野	親戚、近所
22	堂成	親戚、近所
23	大谷	親戚
24	西谷	親戚、近所
25	大尾	親戚、近所
26	大影	親戚、近所、濃い親戚の者
27	川瀬	親戚衆
28	日浦	親戚や近所の人。薄い親戚は来んが、普段つきあいのある近所の人に来る。

込まれてゆく傾向を見て取る事ができる。別稿で詳述する予定であるが、最近の傾向として、新宮村に限らず他の市町村に於いてもこの傾向が強く、親戚でも更に範囲を狭くして、死者の兄弟や子供達だけで行なう場合が非

常に多い。新仏の正月も、地縁を排除し、血縁もできるだけ絞って極く内々で済まそうとしている。新仏は、草場の陰で淋しがっているのではなからうか。

また、これは19の秋田だけでなく新宮村全域に共通する事だが、タツミには寺の僧侶が殆ど関与していない。仏事であるから、僧侶を呼んで念仏をあげてもらっても良さそうなのだが、どの地区でも僧侶の関与は認められなかった。新仏の正月であるが、新仏ではなく「正月」の方に重点が置かれたため、敢えて僧侶を呼ばないようにしたのかもしれない。また、タツミの行事は日時が限定されているため、新仏の家を総て同時に一人の僧が廻るといふ事は不可能であり、物理的な要因もあったと考えられる。タツミの主な舞台は墓前と仏壇の前なのだが、結果的に僧侶は殆ど関与していなかった。

四国各地の市町村に於いて新仏の正月の聞き取り調査を進める中で、血縁を持たない近所の人々の参加がかなり稀薄化している事を肌で感じる。昨今であるが、新宮村の場合まだまだ近所付き合いが大切にされている。表1から近所の参加例を抽出すれば、1・2・4・5・9・11・12・14・16・17・18・19・21・22・24・25・26・28の一八例であり、全体の六四パーセントを占める。中でも、1の天日では遠方の親戚は参加しないものの「親しくつきあっていた近所の衆」は参加しており、また28の日浦でも「薄い親戚は来んが、普段つきあいのある近所の人に来る」と言い、地縁が血縁に勝る場合もままあった。他に、11の大窪では「近所でも好意にしている人は来た」、17の土居では「本当に近い近所の人」、19の秋田では「近所でもつきあいのある人は来たいて来る」と言い、1・28の事例と考え合わせれば、地理的に遠い血縁や地理的には近いが薄い血縁よりも、近所の人々は新仏の正月に於いては重要な意味を持っていたようである。新仏に

とれば、死後初めて迎える正月としての一二月の最初のタツミは、親子・兄弟といった濃い血縁の人々だけでなく、気のおけない友人・知人も同席してほしかったのであろう。少なくとも、この世に残った人々は新仏がこのような感じている事を察して、タツミに参加していたのであった。

三 来客の集まる時刻

新仏の正月を祝うために親戚や近所の人々がタツミの家に集まるが、その時刻は、全一八地区中総ての地区で明らかに変わった。大体は、一二月最初のタツミの日の夕方または晩方という事例が殆どであった。これを纏めたものが表2である。しかし、全二八例を詳細に検討すれば、細かな部分に様々な相違が見られ、これらの中から間接的にタツミの根幹に関わる部分が見え隠れしている。

1の天日では、タツの夕方即ち「宵から集まって来る」という一方で、「朝とおに、夜が明けるのといっしょに集まって来る」とも言う。一見矛盾するようであるが、これは本来の一連の流れが、時代の変遷と共に途中の過程が脱落し、最初と最後まで残らなかったためである。即ち、本来はタツミの家で夕方から翌日の早朝にかけて夜通し起きていたものであるが、睡魔と戦いながら夜通し起きておく事の意味が忘れ去られた結果、一旦自宅に帰って眠り、改めて夜明け頃に再び訪問する形になったと考えられる。タツミの本質は忘れ去られたが、それでも新仏の正月元旦としてのミの日の朝を新仏と共に迎えるという形式だけは軽うじて残されているのであった。「タツの晩の過ごし方」の節で詳述するが、28の日浦では、タツミの家に集まった人々は、タツの晩からミの朝にかけて、「寝るものではない」と

表2 来客の集まる時刻

事例番号	地区	来客の集まる時刻
1	天日	朝とうに、夜が明けるのといっしょに集まって来る。みんな高から集まって来る。タツの晩から集まって来る。タツの夕方。死んでしまひの12月の最初のタツの晩
2	横岡	タツの晩は、12月12日、12時までに、親戚の人々来る。近所の人々は、12時過ぎて親戚の人々が食べ終わった頃をみかからって来る。12月の最初のタツの日の晩
3	木蓮	夕方。タツの晩。12月最初のタツの日の晩
4	泉田	昔は、タツの晩からその家に行き、ミの早朝は墓へ行く。12月最初のタツの日の晩
5	鶴岡野	死んで1年未葬の12月最初のタツの日の晩
6	中野	タツの日。7~8時真親戚が集まって来る。「仏サンのトシを取ったらよい」という意味で、みんな遅くに来る。12月最初のタツの日。昔は日替でやっていたため、ものすごく雪が多く、最も寒い時期で大変であった。
7	中村	親戚の人々は、ミの日の朝6時に墓に来る。タツの晩に家集まって来る。昔は泊まりで泊まっていたが、最近泊まらずに、ミの早朝に車で来て、終わりまで車で帰るケースが増えた。12月の最初のタツの晩
8	中上	ミの朝早く、日が出んうちに来る。タツの夕方集まり、ミの早朝墓へ行く。12月最初のタツの日の夕方
9	田之内	12月最初のタツの晩。タツの日の夕方
10	内野	タツの夕方高から集まって来る。タツの宵から来て泊まる。
11	大塚	タツの晩に集まる。昔はみんな泊まりに来ていたから当然朝早い。しかし、今は泊まらずに近所の人々から車で来る人もあるので遅くなり、朝の8時墓へ墓で作業始めるようになった。12月最初のタツミ。最初のタツミにできなかった場合は二回目のタツミに行かう。
12	寺尾	昔は、タツの晩から遠方の人はその家に来て泊まっていた。12月の最初のタツの晩
13	西ケ市	タツの晩。12月最初のタツの晩
14	青山	タツの晩。死んだ年の12月の最初のタツの晩。初めてのタツにする人もあるし、二回目のタツにする人もある。
15	黒田	タツの晩
16	久保ケ内	タツの夜。12月最初のタツの夜
17	土居	タツの日の夕方頃
18	種野	タツの晩。12月最初のタツの晩
19	秋田	タツの日の夕方。その年中死人は多ければ、その年の12月最初のタツの日親戚集まって来る。
20	下り付	タツの晩。タツの夕方頃
21	細野	親戚の遠方の人前日の晩(タツの晩)から泊まり込みで来ている。近くの親戚は、泊まらずにその日の朝に来る。みんなが一緒に行って墓で各々押し、押分に行くの途次によって、多少時間が異なる。タツミの家の方から朝早く墓へ行くという連絡をしておき、これによって、近所親戚の人々は集まる。墓へ明るくなってから行く。朝の8時から8時半頃行く場合が多いが、家によって多少ちがう。
22	堂成	12月最初のタツの晩
23	大谷	タツの夜。タツの晩
24	西谷	12月最初のタツの日の夕方。みんな親戚(近所)は、夕飯すぎた頃から集まって来る。
25	大尾	12月最初のタツの日の夕方
26	大影	12月最初のタツの日の夕方
27	川端	タツの日の夕方
28	日浦	12月最初のタツの晩。タツの夕方

言いながら「眠りもって座りよる」状況であった。親戚や近所の人々は、新仏と共にトシを越そうという思いで一杯なのであり、昼間の労働から来る疲れや眠気と戦いながら、何としてでも起きておこうとしていた。新仏に対する深く優しい思いやりに大いに注目しておきたい。

2の場岡では、普通は「タツの日の晩」に親戚や近所の人々が集まるが、

家によれば「一二時が境目で、一二時までに親戚の人が来る。近所の人々は、一二時越して、親戚の人々が食べ終わった頃をみかからって来る」と言う。晩と言え七〜八時頃を指すと思うが、一二時とはまた大変遅い時間帯である。早ければ夕方五〜六時この頃にタツミの家に集まり、翌日の未明五〜六時頃墓へ行くのが普通であるが、この間約一二時間の長い通夜

を持て余したのであるか。ここでは、夜中一二時近くまで自宅で待機し、一二時前にタツミの家に入るようにしている。トシコシが「境目」に凝縮され、この間さえ踏ぎ越せばよいという考えの下に一二時に焦点が当てられたのであるが、これも簡略化の一型態と言えよう。来客には酒食が振る舞われるが、ここでは接待の仕方に血縁者と非血縁者の間で大きな違いがあったらしく、近隣の非血縁者は酒食の接待の場に行けばタツミの家の人に余計な気を使わせるという配慮により、酒食の接待が終わった頃を見計らって、敢えて一二時過ぎた時間帯を選んで訪問していた。一二時が「境目」であるならば、近所の人々もトシコシとして一二時にはその場に居て然るべきであるが、故意にこの時間帯を避けたのは、トシコシという宗教儀礼よりも血縁と経済を優先させた結果であろう。酒食の接待は短時間で終わるものではない。近隣の人々は、午前一二時頃にタツミの家を訪問したのである。朝五〜六時に墓へ行くとなれば、タツミの家での滞在時間は近所の人の場合三〜四時間程であり、本来の一二時間程続くトシコシと較べれば四分の一または三分の一しかない。しかも、重要な年越しという点を欠落させている。

4の泉田では、「昔は、タツの晩からその家に行き、ミの早朝にお墓へ行く」と言い、本来のタツミのあるべき姿をよく残している。ここでは、親戚・近所の別け隔てなく、全員が同じ条件の下に約一二時間の通夜を行ない、心おきなくゆったりとした時を過ごし、新仏と共にトシコシをしていたのであった。「昔は」と言う限定から推せば、今はこれも何らかの省略が施されているのであろう。

6の中野では、「七々八時頃に親戚が集まってくる。『仏サンのトシを取ったらよい』という意味で、みんな遅くに来る。一二月最初のタツの日。昔は旧暦でやっていたため、ものすごく雪が多く、最も寒い時期で大変であった」と言う。晩の七々八時という時間帯が、ここでは「遅く」と表現されている点に注目しておきたい。後に詳述するが、全二八例中一三例（四六パーセント）約半数の地区では夕方にタツミの家に集まっていた。旧暦で考えれば、一二月最初のタツミであるから、現在の一月上旬から中旬に相当し、一年中で最も寒く、また日照時間が短い頃である。夕方と言えば午後五時頃であり、五時半を過ぎればもうあたりは真っ暗になっており、タツミの家に集合する夕方とは、具体的に五時前後と考えてほぼ間違いあるまい。因みに、二〇〇三年度の旧暦の一二月最初のタツミは一月七日と八日であり、日の出は六時五十分、日の入りは四時四〇分頃であった。従って、午後七々八時が「遅い」のであれば、本来は日没後まだ少し明るい午後五時前後の夕方頃に訪問していたと考えられる。これは、約半数の地区で夕方集まっていたという数字の上でも証明し得る。ここでも、元は「仏サンのトシを取」るために、夕方から翌日の未明まで、約一二時間にわたって通夜をしていたのであった。新宮村内には、かつて塩塚峰スキー場があった程であり、温暖な気候のイメージが強い愛媛県下とは言え冬の寒さと雪の多さは格別であった。「雪が多」というのは決して誇張した表現で

はない。真冬の、しかも最も気温が低い夜明け前に、タツミの家で夜明けした人々が、氷った細い山道を歩いて墓地へ行くのは、やはり「大変」な事であった。この一行には老人も多く含まれており、彼らにとれば苛酷でさえあった。これら幾つもの困難があっても、総て克服してなお余る程の使命感に裏打ちされたエネルギーがタツミには秘められていた。新仏の正月を迎えてあげよう、新仏と共にトシコシをしようという思いは、親戚や近所の人々を熱く動かしていたのであった。「仏サンのトシを取ったらよい」という人々の熱い思いは、半端ではなかったのである。

7の中村では、「親戚の人らは、ミの日の朝六時には家に寄る。タツの晩に家に集まって来る。昔は一晩泊まっていたが、最近泊まらずに、ミの早朝に車で来て、終わればすぐ車で帰るケースが増えた」と言う。ここでも、かつては通夜があり、新仏と共にゆったりとトシコシをしていたはずであるが、道路の整備と自動車の普及により、人々はかつての精神的余裕を失ってしまった。本来は、便利になって節約された時間と労力を精神的な豊かさのために使うはずであったのだが、逆に人々は現金収入の仕事に走り、益々忙しくなり、新仏と共にトシを越すという心の豊かさや優しさの表徴の部分はどんどん衰退しつつある。物の豊かさが、精神的な部分を貧しくさせるといえるのは一つの大きな皮肉である。衣食住足りて礼節を知るという諺は、物資が貧しい状況がその根底にあって生まれたものであるが、衣食住が余っても人々は礼節を失うのである。「衣食住足る」とは、欠乏するのでもなくまた余るのでもないという、極めて微妙なバランスの上に成り立っている事を、筆者はこの事例から追体験する事ができた。7では、新仏と共に過ごす時間は、朝六時にタツミの家に寄り、そこから墓へ行き、そこで儀礼を行なう間であるから、一時間も無い。日の出が六時五十分であるから、墓地に着く頃はちょうど辺りが薄明るくなる頃である。

2の三〜四時間でさえ短かいと思っていたが、ここでは更に短かくなっている。もうトシコシという概念は、この段階でほぼ消えてしまったと言つてよい。結末部分の年始の挨拶のみが新仏に対して墓前で言われているだけであり、形骸化の一典型と判断し得る。

8の中上では、「ミの朝早く、日が出んうちに来る」と言うが、これも7と同じく、朝六時頃に来たものである。別の伝承では、「タツの夕方頃集まり、ミの早朝墓へ行く」のであるから、これが本来の姿であったと考えられる。かつての一二時間余りも続いた通夜は、各地区で確実に短縮化され、今や欠落の危機に瀕しているのであった。

11の大窪では、「タツの晩に客が集まる。昔はみんな泊まりに来ていたから当然朝は早い。しかし、今は泊まらずに町辺や川之江市の方から車で来る人もいるのでだいぶ遅くなり、朝の八時頃から墓で行事を始めるようになった」と言う。ここでも、かつては一晚の通夜がしっかり行なわれ、未明の朝五〜六時頃に墓へ行っていた。睡魔と戦いながら通夜した人々は、夜が明けのを待ち兼ねて、まだ暗いうちに墓へ行っていたと考えられる。

「みんな泊まりに来ていたから当然朝は早い」という伝承の背景には、このような状況が展開していたのであり、決して安楽に寝ていたのではなかった。ところが、7と同様にここでも道路の整備と車の普及により状況が一変した。しかも、墓へ行く時間帯は、7の如く来客がタツミの家の事情に合わすのではなく、逆にタツミの家が来客の都合にあわすのであった。

新宮村の北隣が川之江市であるが、村を出て生活に便利な川之江市内に居を構えている親戚も多い。このためであろうか、「だいぶ遅くなり、朝の八時頃から墓で行事を始めるようになった」と言うのである。日の出が六時五〇分頃であるから、八時と言えば既に太陽は東の空に一五度以上あがっている。通夜した上で、未明に墓地へ行って儀式を行ない、新仏のトシコ

シを行なっていた時代と較べれば、やはり八時頃は「だいぶ遅く」なると実感されるのであろう。通夜抜きで、いきなりの墓前での儀礼でありしかも既に日は東に昇ってしまっており、トシコシからは程遠い所に来ているのである。

また、11では「最初のタツミにできなければ二回目のタツミに行なう」と言うが、原則はあくまで最初のタツミであり、これはかなり固く守られていた。年によっては、一二月に三回タツミがある場合もあるが、余程の事がない限り二回目は使わなかった。三回目となると、全く無いと言つても過言ではない。なぜなら、三回目は最も早い場合で二五日にタツミが廻つて来るが、この頃は既に迎春準備で多忙になっており、仏事は大いに忌避されるためである。恐らく、一三日以降の二回目のタツミも、余程の事がない限り神事への畏れという事で採用されなかつたはずである。目には見えないが、神事と仏事に関しては、極めて大きなケジメがあった。後に詳述するが、タツミをした家は、その年の年末から年始にかけての正月の神まつりは一切しなかつたのである。タツミの家は、新仏の正月のために、総ての神事を犠牲にして全力を傾けていたとも言える。

21の総野では、「親戚の遠方の人は前の晩（タツの晩）から泊り込みで来ている。近くの親戚は、泊らずにその日（ミの日）の朝に来る。みんなが一緒に行つて墓で各々拝む。拝みに行くのは各家によって多少時間が異なる。タツミの家の方から何時に墓へ行くという連絡をしておき、これによつて近所や親戚の人々は集まる。墓へは明るくなってから行く。朝の八時か八時半頃に行く場合が多いが、家によって多少ちがう」と言う。親戚は、遠い近いによつて泊るか否かが決まると言うが、ここでのタツミは基本的に新仏に対するトシコシであり、遠かるうが近かるうが、また血縁であるか否かに関わらず、新仏と共にトシコシをしてあげようという志を持つ人

々は全員通夜し、墓前で朝を迎えていたはずである。近所の人々や近くの親戚は昔は通夜をしていたが、今は泊まらず朝の八時か八時半頃墓で落ち合うと言うが、これでは本当の意味で新仏に対してトシコシをしてあげる事にはなるまい。眠い眼をこすりながらも通夜し、未明に墓へ行って墓前で夜明けを迎える事が本当の意味のトシコシまたはトシトリであつてみれば、遠方の親戚だけトシコシを新仏と共にして、近くの親戚や近所の人々はトシコシを新仏と共にしなかつた事になる。

また、墓へは「明るくなってから」大体「八時か八時半頃に行く」という説明も、本来の夜明け前（六時前）に行く事と較べれば二時間余りの遅れがある。墓へ行く時刻の遅延は、近所や近くの親戚がタツの夕方にタツミの家に集まらなくなり通夜をしない事と連動しており、トシコシの作法そのものの本質が骨抜きになる事をも意味する。この現象は、単なる二時間余りの遅延だけに終わらず、新仏の正月行事全体に甚大な影響を及ぼしていた点に注目しておきたい。

以上、来客が集まる時刻に主眼を置きながら、その変容の具体的事例を1・2・4・6・7・8・11・21の八例を抽出して論じたが、本来のタツの夕方が翌朝の六時とか日の出前・八時または八時半となり、だんだん遅くなっている傾向が見られる。タツの日の夕方から見れば、ミの日の八時半は一五時間半もの遅延であり、集まる場所もタツミの家から墓前へと大きく変化している。墓前で、新仏に対してほんの形だけ新年の儀礼が行なわれるが、タツの日の夕方からの通夜が伴わないのであるから、もうトシコシとは呼べなくなっている。この傾向は、11・21だけでなく7にも見られるが、7の場合夜明け前にタツミの家に行っており、まだ墓前で新仏と共に夜明けを迎えて本来の姿を残そうとする親戚側の姿勢が感じられるが、11・21に至っては通夜もなければ墓前で夜明けを迎えるという姿勢もなく、

新仏の正月の観念に立てば相当逸脱したものになりつつある。総て、生きているヒト側の御都合主義となり、新仏と共に正月を迎えるという本来の主旨が霞んでしまい、単なる形式的な儀礼に終わろうとしている。

いくらかの変容が見られるものの、全二八地区では表2に示した如く、総ての地区でタツの日の「夕方」または「晩」に來客が集まるという伝承が聞けた。まだまだトシコシは各地区で健全なのである。「晩」と「夕方」は、その時間帯に大差はないように思うが、やはり微妙に違っていた。「晩」の場合、2では夜の「一二時まで」に來ると言うがこれは例外である。6では「七〜八時頃親戚が集まって來る」と言うため、ほぼその頃と推定できる。晩であるから、当然日もとつぷりと暮れ、辺りは真つ暗になつていなくてはならない。この頃の日没が四時四五分頃であるため、午後六時頃から「晩」の範疇に入つていたかもしれない。

一方、「夕方」は五時前の日没前後から暗闇になるまでの間であるから、約一時間程の幅がある。旧暦時代、電灯もない頃であるから、他家を訪問する際は、安全のためなるべく足元がまだ明るい時間帯を選んでいたのではないだろうか。「夕方」と「晩」の比率は次の通りである。

◎夕方 1・3・8・9・10・17・19・20・24・25・26・27・28（全一三例、四六パーセント）

◎晩 1・2・3・4・5・6・7・9・11・12・13・14・15・16・18・20・21・22・23（全一九例、六八パーセント）

1・3・9・20の四地区で「夕方」と「晩」が重複するため、両者の合計が一一四パーセントになつてしまつたが、全二八地区中「夕方」が約五割、「晩」が約七割を占めており、晩の方が二割程多い。数の上では「晩」が上回っているが、電灯もないかつての旧暦時代を考えれば、「夕方」の方が元の姿をよく留めたものと言えよう。約半数の地区では、道路が整備さ

れ車が普及した時代でさえも、夕方から訪問し朝まで夜明けしをする事にこだわっていたのであり、古風をよく残したものと注目しておきたい。

また、「夕方」にしろ「晩」にしろ、幾つかの地区で変質のきざしはあるものの、総ての地区では前日から翌日の未明にかけて通夜があり、6の「仏サンのトシを取ったらよい」と言う如く、トシトリが文字通り実行されていた。葬式の「通夜」や正月や節分のトシコシを考え合わせた時、一晩中寝ずに起きておく意味が一体何であったのか、この問題の本質を解き明かす手がかりを、新宮村のタツミは我々に投げかけているような気がしてならない。

四 タツミの家での挨拶

タツの日の夕方にタツミの家を訪問した際に親戚や近所の人々は、家人に対して一つの挨拶を交わす。決まった言い回しは無いようだが、各地では思い思いに述べられており、挨拶の文言からもタツミが人々の心の中でどのような受けとめられていたかがある程度理解できよう。これを纏めたものが表3である。

27の川淵では、「挨拶は、どう言うか知らん」とあるが、多くの地区では殆ど意識化されていなかった。聞き取り調査に廻る中で、どう言う挨拶をするのかという問い掛けに対し、多くの伝承者達は一瞬困惑ぎみの表情を浮かべていた。当たり前の事を、今更なぜ聞くのかという思いがその表情の裏に隠されていた。一〇地区ではこの質問に答えないうまま他の話に及んでしまったが、一七地区では曲がりなりにも何らかの回答を得ることがで

表3 家での挨拶

事例番号	地区	家での挨拶
3	木蕨	「今晚は、死んだ人のお正月ですけに」といいながら挨拶をかわす。
10	内野	おめでとうございますとは言ってはならない。「タツミに来ました」と挨拶する程度。
12	寺尾	「だれそれさんのお正月でございます」とか、「だれそれさんのタツミでございます」と挨拶して家に入る。
13	西ケ市	「今晚はタツミじゃ」という挨拶をして家に入る。
14	青山	「今晚はタツミでございます」という挨拶。
15	黒田	「だれそれさんのタツミでございます、ごくろうさまです。よろしくお願いします」という挨拶をする。
16	久保ケ内	「タツミでございます」という程度の挨拶。
17	土居	「お年越しじゃ」と言うて行く。なしになった人のお年越しというあいさつをして行く。
19	秋田	「タツミでございます」という程度の挨拶。
20	下り付	「今日はタツミでございます」と言う程度で、決まり文句の挨拶はない。「おさびしゅうございます」とも言う。
21	総野	「こちらの仏事です。今日は来ました」と挨拶する。
22	堂成	挨拶で「おめでとうございます」は言わない。「おさびしゅうございます」というような意味のことを言う。
23	太谷	「おじいさんのお正月でございます」というぐらいの挨拶。
24	西谷	「今日はだれそれさんのタツでございます」といって挨拶をする。
25	大尾	「ごくろうさまでございます。」近所や親戚の人がタツミの家に来れば、「今日はだれそれさんのお正月で、おめでとうございます」と挨拶すれば、タツミの家の人はおくろうでございますと答える。
26	大影	「新仏さんのお正月でございます。お焼香に来ました」という程度の挨拶。おめでとうは言うたらいかん。新仏じゃけに、死んで365日近い人から、4～5日前に死んだ人までいろいろある。4～5日前に死んだ新仏さんのお正月など、本当に何と云うてええやら言葉が見つからない。
27	川淵	挨拶は、どう言うか知らん。
28	日浦	「仏さんのお正月で、ゴタイギでございます」という挨拶をする。大儀なからうという意味。「おめでとうございます」という挨拶はしてはならない。よわる（困る）なあという意味で、「ご大儀でございます」という。

きた。

3の木嵐では、「今晚は、死んだ人のお正月ですけに」と言って、新仏のための正月に來た事を表明しているが、このパターンは案外多かった。12では「だれそれさんのお正月でございます」とか「だれそれさんのタツミでございます」と言い、15の黒田では「だれそれさんのタツミでございますしてこころうさまです。よろしうお願いします」と言う。また23の大谷では「おじいさん（その家のおじいさんが死んだ場合）のお正月でございます」、24の西谷では「今日はだれそれさんのタツミでございます」、25の大尾では「今日はだれそれさんのお正月で、おめでとうございます」、26の大影では「新仏さんのお正月でございます。お焼香に來ました」、28の日浦では「仏さんのお正月で、ゴタイギでございます」と挨拶していた。つまり最初に死者の名前または「おじいさん」などの家族構成員名、「新仏さん」・「仏さん」など死後一年未満の人を指示し、その人のためのお正月・タツミの行事に参加するために來たという來意を告げるものであった。

この型が省略されると、死者の固有名詞や「新仏さん」などの文言が消えて、10の「タツミに來ました」、13の「今晚はタツミじや」、14の「今晚はタツミでございます」、16・19の「タツミでございます」、17の「お年越しじや」、20の「今日はタツミでございます」、21の「こちらの仏事です。今日は來ました」という形で、來意のみが告げられるのであった。但し、単なる衰退化としての省略形だけではなく、できるだけ家人に死の悲しい気憶を思い出させたくないという配慮の下に、敢えて死者の固有名詞や「新仏さん」などの文言を入れなかった場合もある。「タツミでございます」という短い挨拶の裏に、家人達への様々な思いが凝縮されていたのである。親戚や近所の人々は、言葉だけでなく、顔の表情や所作の一つ一つに、死者と共にトシコシをするメッセージを込めていたのであった。

タツミの気分を最も直截に表明したものは、20の「おさびしゅうございます」であろう。また22では『「おさびしゅうございます」というような意味のことを言う』とあり、具体的な挨拶の文言は不明であるが、家人と共に死者を追悼し、死者のためにトシコシをしようとする意図が窺える。また、28では「仏さんのお正月で、ゴタイギでございます」と言うが、タイギとは大儀の事であり、「よわる（困る）なあとという意味」と説明する如く、家人を失った人々と悲しい心を共有し、共に死者のための正月をしてあげようという意志がこの裏に隠されている。また、21の「こちらの仏事です」という挨拶も悔み事を前面に出しており、26の「新仏さんのお正月でございます。お焼香に來ました」も、新仏の正月が「焼香」に代表される如く優れて仏事であった事がわかる。従って、「おめでとうは言うたらいかん」のであり、「新仏じやけに、死んで三六五日近い人から四五日前に死んだ人までいろいろある。四く五日前に死んだ新仏さんのお正月など、本当に何と云うてええやら言葉が見つからない」と言うのであった。確かに、正月であるから一応はめでたいはずであるが、悔みの方が優先するため、「おめでとう」は言えなかった。通常は、死後四九日（ミツキ越しの場合は三五日）経過しなければタツミを行なわないのであるが、ここではその枠組みが取り私わかれていたようである。死後、幾日も経っていなくてもタツミが行なわれる場合があったようであり、この場合來客は本場に挨拶の言葉に窮していた。本来は、四九日経過して、死者霊はやつと新仏になれるのであるが、最近では親戚が都市部に住む場合が多く、遠來の客の煩を避けるため、略式で葬式の翌日または葬式後に四九日の法要を済ます傾向がある。形式的には、四十九日を済ましたからもう新仏になっているため、タツミをしても不都合ではないのだが、無理な前倒しをしても心がついて行かない。心の整理がつかないまま、無理にタツミを行なうのだから「本當

に何と云うてええやら言葉が見つからない」のは当然であり、新仏や遺族・親類・縁者のためにも一年先送りして、落ちついた状態でタツミを行なうべきであったと考えられる。

25の大尾は、新官村で唯一「おめでどうございます」と挨拶をする地区であった。10では「おめでどうございますとは言ってはならない」、22では「挨拶で『おめでどうございます』は言わない」、26では「おめでどうは言わない」、28では『おめでどうございます』という挨拶はしてはならない」と禁止しているにも関わらず、独り25のみ「今日はだれそれさんのお正月で、おめでどうございます」と挨拶し、反対の姿勢を示すのであった。「仏事」とか「焼香」というイメージがある一方で、墓前には門松やシメ縄さらに一升一白で作った一枚の鏡餅を供えるという外見上の形を重視したためであろうか、敢えて「おめでどう」と言うのであった。これに対し、タツミの家の人は「おごくろうでございませう」と応対しているが、この中にこそタツミの真意が込められていると考えられる。本当にめでたいのであれば、家人も「おめでどうございます」と返答して然るべきであろう。実際の正月の挨拶でも互いに「おめでどう」と言い合っている。

しかし、ここでは「おごくろう」なのであった。年末の一二月に入り、何かと気ぜわしい時期に、夕方から翌朝まで新仏と共に正月を迎えるために貴重な時間と労力、さらにはオツツミとしての金や供物としての品物まで浪費させるのであるから、しかもこれが重要なのだが、祝いではなく悔やみ事のために来るのだから、やはり「おごくろうでございませう」と応対する他はない。来客の「おめでどうございます」は、あくまで「正月」という立て前だけの挨拶であり、余程の筋だけを通す事が好きな人以外はこのような挨拶はできなかったはずである。やはり、「おさびしゅうございませう」か「ご大儀でございませう」という所が、タツミの心に最もふさわしい

挨拶であったと考えられる。

五 タツミの家に持参する物

一二月の最初のタツミの日の夕方、親戚や近所の人々は「おさびしゅうございませう」などと挨拶をしながら新仏の家を訪問するが、この時必ず何らかの物を持参する。これを纏めたものが表4である。全二八地区中一九地区で（26と28の二地区は持参していないので分析対象からはずして一九地区とした）その具体的内容が明らかになったが、多くはオツツミと呼ばれる金と、お供えと呼ばれる菓子類であった。

◎オツツミ 1・2・3・5・6・7・8・10・11・14・15・16・17・19
・21・23・24・25・27（一九例）

◎お供え。1・2・3・5・6・10・11・15・16・17・23・24・25・27（一四例）

判明する一九例中、オツツミは絶ての地区で持参されており、お供えは一四例で七四パーセントの地区で持参されていた。新仏の正月に行く場合、金の包みは絶対に必要なものであり、仏前に供えるための菓子は、多くの地区でオツツミに添えて持参すべきものと考えられていたようである。金の包みだけでは格好がつかないので、何か形ある物を故人に供えたいという思いが働いたのであろう。

2では、「五千元とか一万円を包んで持参する。家によれば三千円程度の菓子箱とお供え（包んだお金）を持参する」と言い、金だけの場合と、金と菓子の二つに分けて持参する場合もあるようだが、家によっても思い思いに変化があったようである。交際帳を見ながら、前に貰った分だけは返

表4 タツミの家に持参するもの

事例番号	地区	タツミの家に持参するもの
1	天日	お供え物・ツツミ（お金）・菓子箱など、みんな思い思いに持って集まる。
2	鳩岡	親戚の人は、五千円とか一万円を包んで持参する。家によれば三千円程度の菓子箱とお供え（包んだお金）を持参する。家によってちがうが、仏さんに豆腐をまつる家もあるらしい。常に豆腐を買う場合、一丁豆腐は買うものではない。必ず二丁買わないかんという。
3	木風	お金のお包みと、手みやげに菓子。お金のお包みは必ず持参する。お仏壇にまずお参りして供えるが、この時念仏は申さず、鉦を叩いて、手をあわすだけ。
5	嵯峨野	ほんのお供え程度。お金か菓子を添えて持って行き、仏壇にまずお参りする。
6	中野	お包みは、必ず親戚の人が持って来る。この中にはお金が入っている。この他に菓子を添える場合もある。
7	中村	親戚の人らは、必ずお包み（中にお金が入っている）を持っていく。
8	中上	親戚の人らは、お供え（銭のつつみ）を持って集まる。
10	内野	オツツミ（千円でも二千円でも）を包み、これに供物として菓子箱を添えて持って行く。一丁豆腐は、この辺は持参しない。
11	大窪	お供えとオツツミを持参。
14	青山	オツツミのノシは、死んだ時のノシ（白と黒）で持って来るか、黄と白のノシのついたもので、銭を包んで持って来た。
15	黒田	オツツミとお供えを持って行く。お供えを添えて持って来る人があり、オツツミだけの人もあり、いろいろである。
16	久保ケ内	お供え物（菓子など）とか、オツツミ（銭）。
17	土居	お供えと言って、オツツミ（銭のこと）か、品物を持って行く。
19	秋田	ツツミ（銭）ぐらいは持って行く。
21	総野	お供え物と銭を包んだもの。
23	大谷	お供え菓子とオツツミ（銭）。麦一升を持って行くのは知らん。オツツミ（銭）を持って行く程度。
24	西谷	親戚中から一丁豆腐が集まると大変なので、近くの人には豆腐を持って行ってあげるが、遠くの親戚は菓子やオツツミ（銭）を持って来てトーフにかえる。昔は、近くの人には必ず一丁豆腐を下げてタツミの家に行った。オツツミを持参しても、これとは別に豆腐は下げて来るものであった。今は簡略にしようとしているが、昔の年寄りが健在な家では、一丁豆腐は必ず持って来るものとしている。タツミの時に持って行くオツツミには黒と白のノシがついている。
25	大尾	タツミの時に持って行く物は、お供えとして、品物かオカネを包んで持って行く。
26	大影	麦二升持って行くというは知らん。
27	川淵	親戚や近所の人はお供えを持って来るが、これに対してのお返しは一切しない。普通であればいろいろとお返しはするのだが、この時に限ってはしない。酒を持って来る人があれば、うどんを持って来る人もある。コンブを持って来る人もある（普通は、ヨロコンブと言って持って来てはいけない）。麦二升持って来るのは知らん。タツミのお返しはしない。なぜなら、こういうことが何度もあってはいかんという意味だから。オツツミは黒と白で来るが、ウマの日の祝い直しの時には、赤と白です。タツミのお供えは、黒と白のノシです。
28	日浦	一丁豆腐は知らん。供えもしない。

そうとしていたのであろう。金だけか、または金と菓子の組み合わせかは、故人やその家族の好みも考慮して決めていた。

3の木風では、「お金のお包みと、手みやげに菓子。お金のお包みは必ず持参する。お仏壇にまずお参りして供えるが、この時念仏は申さず、鉦を

叩いて手を合わすだけ」と言う。玄関で「死んだ人のお正月ですけに」と挨拶した客は、仏前に通され、ここで供物とオツツミを供えて鉦を叩いて故人（新仏）と対面し、これから共に夜明かしをして正月を迎える事に思

14の青山では、「オツツミのノシは、死んだ時のノシ（黒と白）で持って来るか、黄と白のノシのついたもので銭を包んで持って来た」と言う。前節で詳述した「おさびしゅうございます」と挨拶をする心と同様、新仏の正月は祝うべき「正月」に意味があったのではなく、死後四九日目に降から一年未満の死者霊（傍点筆者）に対して正月行事をしてあげるといふ意味があった。祝事というよりは、優れて仏事であったのであり、お悔みの挨拶と共にノシ袋にも黒と白の水引が使用されていた事には必然性がある。最近では黄と白の水引が登場しているようであるが、かつては黒白だけで、黄色はなかったという。

最近の傾向として、葬式は黒と白の水引だが、法事（一周忌とか三回忌など）の場合は葬式と区別して黄白が使われるようになったと言う。葬式ほど強い忌みを持たないという意図が、黒から黄に変更された背景にあるようである。

黒白の水引は、14だけでなく24の「タツミの時に持って行くオツツミには黒と白のノシがついている」、27の「タツミのお供えは、黒と白のノシでする」の伝承にも表明されている。この点から推せば、他の一六地区に於いても、言及こそ無いものの、詳細に話を聞けば悔み事を象徴する黒と白の水引が金の包みにかけられていた事はほぼ確実であろう。新仏の正月は、どの地区に於いても仏事として位置付けられていたのであった。

24の西谷では、「親戚中から一丁豆腐が集まると大変なので、近くの人は豆腐を持って行ってあげるが、遠くの親戚は菓子やオツツミ(銭)を持って来て豆腐にかえる。昔は、近くの人は必ず一丁豆腐をさげてタツミの家に行つた。オツツミを持参しても、これとは別に豆腐はさげて来るものであつた。今は簡略にしようとしているが、昔の年寄りが健在な家では、一丁豆腐は必ず持つて来るものとしている」と言う。タツミには手みやげとして、必ず一丁豆腐を持参すべきものという仕来りがかつてあつたようである。別稿で詳述する予定であるが、東隣の徳島県美馬・三好郡下、さらに東北部に隣接する香川県下に於いても豆腐は新仏の正月の供物としては特に付き物であつた。愛媛県下全域の趨勢では、豆腐は殆ど登場しないが、新宮村が徳島・香川両県下に隣接する所から、このような伝承が存在したのである。別稿で詳述する予定であるが、仏壇や墓への供物として豆腐は新宮村の一二地区で登場し、全体の四三パーセントを占める。案外、豆腐の登場率が高いのであり、24の如く手みやげとして必ず一丁豆腐として持参していたという事例は、元は他に数多くあつたはずである。タツミの家で豆腐を揃えるようになったため、手みやげとして豆腐を持参する風習は廃り、独り24のみに化石的に残つたのであろう。それにしても、「親戚中から一丁豆腐が集まる」とか、「昔は、近くの人は必ず一丁豆腐をさげてタツミの家に行く」とか、「オツツミを持参しても、これとは別に豆腐はさ

げて来るもの」とか、「昔の年寄りが健在な家では、一丁豆腐は必ず持つて来るもの」であつたと言う伝承は、新仏の正月と豆腐の関係が古くから極めて深いものであつた事を物語っている。

27の川淵では、「親戚や近所の人はお供えを持って来るが、これに對してのお返しは一切しない。普通であればいろいろとお返しはするのだが、この時に限つてはしない」、「なぜならこういうことが何度もあつてはいかないという意だから」と言うが、これに對しては少し誤解があるような気がしてならない。愛媛県下の他の地域(例えば同桑郡下や東予市さらに柳谷村・河辺村・日吉村・内海村・津島町・一本松町・大三島・佐田岬半島地域)では、死者を出した新仏の正月を行なう家側から貰つた餅に對して、死を連想して返礼した側も死者を出す事になるといふので、オトミとかイレミという返礼はしない事になっていたのであり、親戚や近所から貰つた物に對しては、タツミの餅や祭壇に供えていた供物を後でバラして、参加者全員に均等に分配して持ち帰らせていた。これら、死者と直接関連するタツミの餅や引き出物に對してのみお返しはしないのであつて、27の伝承は忌避する対象が逆転していると言わざるを得ない。

以上、タツミの家に持参する物について言及したが、金と供物を黒白の水引をつけて持参する事により、「正月」とは言いながら、新仏に對してお悔みの意味を含ませていた事をここで再確認しておきたい。かつて、徳島県一宇村での新仏の正月を考察したが、そこでは来客は必ず麦二升とか一升を持参するものであつたが、23では「麦一升を持って行くのは知らん」、26の大影では「麦二升持つて行くのは知らん」と言い、自給自足経済を反映する農作物としての米や麦を持参する事例は一例も見られなかつた。早くから貨幣経済が浸透していた裏返しであろう。

六 タツの晩に出す食べ物

夕方から晩にかけて来た客は、翌日の未明までタツミの家で通夜するわけだが、当然晩飯ならびに夜食を出さねばならない。これを纏めたものが表5である。全二八地区中一七地区でその詳細が明らかとなったが、取り立てて大きな特色は見られなかった。事例数が多い順に列挙すると次の通りである。

- a 1. 決まったごちそうは作らない。1・5・11 (三例)
- a 2. ありあわせで夕食。3・23・27 (三例)
- a 3. お茶づけか何か。5 (一例)
- b. 餅。1・2・3・5・11・25 (六例)
- c. 酒。2・10・11・13・16 (五例)
- d. お膳。2・8・9・10・21 (五例)
- e. 豆腐。1・3 (二例)
- f. 茶。2・13 (二例)
- g. 甘酒。2・5 (二例)
- h. パラ寿司。1 (一例)
- i. 仕出し屋からのサワチ (傍点筆者。皿鉢料理)。6 (二例)
- j. 雑煮。7 (一例)
- k. 手打ち蕎麦。17 (一例)

a 1とa 3のa群七例は、「決まったごちそうは作らない」・「ありあわせで夕食」・「お茶づけかなにか」と言った極めて漠然としたものとして共通するため一括した。特定の決められた御馳走が無いと言うのも、特徴と言えば特徴になるかもしれない。次に多いのが餅の六例であり、翌日の未

表5 タツの晩に出す食べ物

事例番号	地区	タツの晩に出す食べ物
1	天日	タツの晩には決まったごちそうは作らない。豆腐を出し、餅もたくさん揃っているのだから、大したオゴツオオリは出さない。スシなどを昔は作っていた。夕飯と朝飯の間に夜食を出す。たいていぬくもるようなものを出す。しかし、うどんは長びくということで忌避して出さなかった。タツミや葬式の時にはうどんは出すものではなかった。豆腐は、タツミや葬式の時には好んで出していた。
2	橋岡	夜中の12時に餅を出したり、お膳をちよっとして、ごちそうを出す。近所の人々は、12時越して、親戚の人らが食べ終わった頃をみはからって来る。最近はお茶やお酒、甘酒を出す程度にしている。
3	水葦	タツの宵には餅をたくさん揃えておく。アン入りの餅、御飯。この時の食べ物として決まったものはない。ありあわせで夕飯を出し、夜食は餅を出す。うどんはしない。最近魚も使うようになったが、昔は使わなかった。
5	蜂塚野	親戚は夕方までに集まり、夕食は軽く、お茶づけか何かで食べる。その晩に出すものとしては、昔は旧暦でしていたので寒かったため、夜中に甘酒を作って出していた。今は新であるからあまり寒くない。甘酒の他に、アン入りの餅を出す。お茶菓子として出す程度で、他に変わったものはない。夕方までに餅も全部揃え終わっている。タツミには、これという決まった作りものはない。
6	中野	仕出し屋から鉢物(サワチ)を取って、ごちそうを食べてもらう。夕ごはんの食べ初めは8~9時頃になる。
7	中村	タツミの晩に出す決まった食べ物はない。その家によってちがう。普通は雑煮などが出る。田舎は作らない。
8	中上	タツの晩には、蕎麦とおつゆと、お皿(煮物など)をこしらえて出す。
9	田之内	昔はお夜食をこしらえて食べていた。御飯、おかず、おつゆ、煮しめを作っていた。
10	内野	お煮しめ、吸い物、皿に餅を揃えて出す。吸い物にも魚なら何でもかまわず入れた。今はハモの切り身が入っている。とにかくこの日は魚が出ないかん。そうして、酒をあげる。
11	大塚	酒もごちそうも出す。決まった食べ物はない。小さな餅をたくさん揃く。この餅を来客に出す。
13	西ケ市	お茶でも、お酒でもよばれて、タツの晩は夜明かしをする。
16	久保ケ内	酒も出る。
17	土居	夕食にはソバを出す。今はうどんぐらいを夕食に出す。昔はソバを出す。手打ちのソバであり、ソバゴメではない。
21	総野	家に入ったら膳につき、みんなが一盃のみ。
23	大谷	この晩に出す決まった食べ物はなく、普通の食事。
25	大尾	お夜食に餅を食べる。
27	川瀬	この時に出さないかん決まったごちそうはない。適当なものを出す。

明に墓前で餅を形式的に焼き、鍋蓋の上で餅を切って、庖丁に突きさして肩口から後方に居る人に食べさせる儀礼を行なうため、夕方までに餅を揃えて用意している。さらにこれだけでなく、ミの朝、行事終了後に来客が帰る際、みやげとしてタツミの餅を偶数持ち帰って貰うが、この分もタツミの夕方までに揃え上げておく。従って、揃えだての餅が豊富にあるため、

この一部分を夜食として来客に振る舞うのは十分有り得る事である。

三番目に多いのが酒五例とお膳五例であった。酒の場合、冬の長い夜を起きて過ごすため、暖まる意味で、また集まった人々と談笑するために出されたものである。一方のお膳は、2の場合には「ちよつとしたごちそう」、8は「御飯とおつゆとお皿(煮物など)」、9は「御飯、おかず、おつゆ、煮しめ」、10は「お煮しめ、吸い物、皿(鯖)」とあり、微妙に中味が異なるが、所謂普通に食べる定食に近いものであり、ひよつとすればa群七例の「決まったごちそうは作らない」というものとかなり近いかもしれない。タツミだけに作る特定の料理というものは特に見られない。但し、かつての食生活からすれば、白い米の飯が食べられるだけで最高の御馳走であったかもしれないし、その上にもっと稀少な餅や酒が振舞われるのであるから、贅を尽くしたものと言うべきかもしれない。物が豊かになった結果、白い御飯や餅の偉大が見えなくなったため、a群の「決まったごちそうは作らない」とか、「お膳」が無感動なまま列挙されるに至ったのである。我々は、豊かさの中で数多くの感動を失ない、今まで見えていたもの多くが見えなくなってしまうという不幸を背負い込んでしまったようである。この他、豆腐・茶・甘酒が各二例ずつ、バラ寿司・サワチ・雑煮・手打ち蕎麦が各一例ずつ見られるが、これらは少数派であり、特に決められたものではなかった。しかし、豆腐二例は前節で詳述した如く、24の西谷ではかつては親戚や近所中から豆腐一丁が持ち寄られていたようであり、更に一丁豆腐を仏壇や墓に供える事例が全地区の四三パーセントで見られた点から推せば、本来は豆腐は餅と共に来客に定番の料理として出されていた可能性は極めて高い。豆腐は、餅のように日持ちがしない。家族の員数が減少した現在では、食べ切れないで腐らせてしまうため、来客も供物として持参する事を手控え、結果として少数派の二例になったものである。

う。

また、雑煮が一例7で見られるが、これは本来は夜明け前後の墓前での儀礼が終わった段階で、トシトリの最終段階として来客に振舞われる物であった。まだ夜も明けていないのに、また墓前で餅を食べる儀式が済まないうちに雑煮を食べても、トシトリをした事にはならない。元の意味が忘れられ、単なる食べ物の一種としか見做されなくなった結果、雑煮が出されるに至ったのであろう。7では「普通は雑煮などが出る」と言うが、本来は墓から帰った後に出すべきであった。

10の内野ではお膳を出すのが、「皿に鯖を据えて出す。吸い物に魚なら何でもかまわず入れた。今はハモの切り身が入っている。とにかくこの日は魚が出ないかん」と言い、かなり魚に対するこだわりがある。僅か一例ではあるが、実はこの伝承には翌日に行なわれるウマの日の行事との密接な関連性が認められる。別稿で詳述する予定であるが、来客達はミの日の午前中に自宅に帰り、餅または団子を作ってこれをタツミの家に祝い直しとして持参する。この時に、必ずナマグサモノとして魚やイリコを添える事例が四地区で見られた。これは、仏事としてのタツミの終焉を意味し、ウマの日は新たに神事として祝う、または縁起直しをするという事で殊更に仏事で忌避するナマグサモノを添えるのであった。この縁起直しを先取りする形で、10では新仏の家がタツの晩に来客に魚料理を出していたようである。しかし、これも7の「雑煮」と同様に、先取りの時が早すぎた。更に、祝い直しであるから新仏の家が出すのは筋が通らない。これは、新仏を出さなかった家、即ちタツミの来客が、縁起直しの餅や団子と共にナマグサモノを添えて持ってきてくれるからこそ意味がある。あくまで新仏の正月は仏事であり、ナマグサモノは避けなければ成立しなかった。仏事の真つ最中の夜中に、その主催者側が魚料理を出す事は、それ自体が破戒行為と

なっていたはずである。

一方、3の木嵐では「最近魚も使うようになったが、昔は使わなかった」と言い、6の中野ではこれを証明する如く「仕出し屋から鉢物（サワチ）を取ってこちそうを食べてもらおう」と言う。新仏の正月は仏事であり、本来は精進料理を出すべきであったが、白い御飯や餅に魅力が無くなり、必ずしも貴重な食べ物とは見做されない時代に入れば人々は更なる美味を求めて魚料理に走るのであり、高級な魚貝類を極めて大きな皿に盛り付けて全員で食べあう皿鉢料理が登場する事になる。この3・6は、前述の10と魚を食べるといふ点では外見上共通するかに映るかもしれないが、その内実は全く正反対である事を認識しておきたい。3・6は禁忌の弛緩によって惹起されたものであり、10は精進落としの意識の拡張によって時期が前倒しされ、主催者側が主客転倒したために見られる現象なのであった。

1の天目では、タツの晩の夜食には「ぬくもるようなものを出す」と言いがら、「うどんは長びく」ということで忌避して出さなかった。タツミや葬式時には出すものではなかった」と言う。新仏の正月として位置付けられてはいるが、葬式と並置される如く、一日でも早く不幸事は過ぎ去って欲しいという感覚は常にどこかにあった事を物語る伝承である。真冬の夜中であるから、「うどん」は暖まるための代表的な食べ物であるが、その形状が細長いため、死の気憶が長びく事が連想され、遂に最適の食べ物か忌避すべき対象にまでなっている。これ程までに、人々の心の中には死を早く過去のものにしたいという願いがあり、これを具現化する儀礼が一連の新仏の正月としてのタツミなのであった。

七 タツの晩の過ごし方

タツの夕方から晩にかけて、親戚や近所の人々はタツミの家に集まり、新仏と共にトシコシをするため、原則的に夜通し起きており、夜明け前に全員墓前へ行って朝を迎え、ここで一升一白餅を一切れずつ食べる儀礼を行っていた。本節では、一連の流れの中でも特に夜の過ごし方に焦点を当て、その詳細を明らかにしておきたい。これを纏めたものが表6である。全二八地区中、その詳細についての伝承を明らかにしていたのは4・18・22の三地区を除く二五地区である。これらの伝承の大半はタツミを行なう側からのものであるが、中にはタツミを行なう側またはタツミの行事に参加する親戚や近所の人々ではない、一般の人々の視点に立った伝承もいくらか含まれている。この伝承に注目する事によって、タツミの儀礼がより立体的に浮き彫りにされると思われるので、こちら側から先に考察を進めておきたい。

(一) タツミに関係のない家は、タツの晩は早く寝る。

5の嵯峨野では、「タツの晩には、普通の家では夜遅くまで起きているものではない。タツミの家は夜通しおきているから」と言う。7の中村では「タツミをしない家は、タツの晩は早く寝ないかん」、11の大窪でも「タツの晩は、何も無い家は、早よ寝ないかん」、12の寺尾では「タツミのない家は、タツの晩は夜ふかしなどせずに早く寝なければいけなかった。タツミのある家では夜通し起きとくから、そうでない家は早く寝なければいけなかった」と言う。また、16の久保ケ内では「タツミのない家は、タツミの晩は早く寝ないかんという。不幸を受けとる人は夜おそくまでおきているため、不幸を受けてない人の家では早く寝る」、17の土居では「タツミのな

表6 タツの晩の過ごし方

事例番号	地区	タツの晩の過ごし方
1	天日	タツの夕方には、みんな集まり、グダグダ言うて、一夜を寝ずに過ごす。お仏壇にお念仏をあげて、翌日夜が明けると同時に、まだうす暗いうちに墓へ行く。昔はタツの晩からミの朝にかけて夜も寝ず、起きて話をしていたが、最近はみんな寝るようになった。ええかげんに寝て、朝早くおきる。タツの晩に、他家は早よ寝ないかんとは知らん。
2	鳩岡	今は車が普及しているから、あまり家で泊まる人はいない。昔は、親戚の人らは必ず泊っていた。仏壇で念仏をあげることがするが、坊さんが来ることはない。親戚の人が一通り揃うと、仏壇で念仏をあげて、そのあとでごちそうを出す。タツの晩に、他家は早よ寝ないかんとは知らん。
3	木瓦	餅やごはんを食べながら、夜おそくまで起きて、夜明け前に墓地へ行く。タツの晩は死んだ人の話をしながら、12時すぎまで夜寝ずに起きていた。昔は夜通しおきていたが、今は寒い時分でもあり、ええかげんにして寝る。それでも久しぶりに親戚が会うのでなつかしくて長話もする。11時や12時までは起きて話をする。寺の坊さんは来ない。
5	嵯峨野	タツの晩には、普通の家では夜遅くまで起きているものではない。タツミの家は夜通しおきているから。オコタを誂んで、夜更けまで死人の思い出話をしていた。昔は、夜明け前ぐらいに墓へ行く。今は略式になって、夜が明るくなってから行くように変わった。墓へ行く前に仏壇で念仏を唱え、墓でも一応みんなが念仏を申す。
6	中野	タゴはんの食べ始めは8~9時頃になる。酒やごちそうが出て、その日は夜通しおきて、死人の思い出話などをする。親戚が全員揃えば、仏壇の前でお念仏をする。その後ごちそうをよばれて、コタツやストーブにあたりながら、「もうええかげんにしまいせえや」といいながらも、12時すぎでから墓へ行く。昔は夜寝ないものであり、オコタにあたり、夜通し死んだ人の話をするものであった。朝は日が出るよりも先に、墓の新仏さんのカダアケをした。
7	中村	昔は一晩泊まっていたが、最近は泊まらずに、ミの早朝に車で来て、終わればすぐ車で帰るケースが増えた。タツミをしない家は、タツの晩は早く寝ないかん。
8	中上	タツの晩は、夜通し死人の思い出話などをする。普通の家は、タツミの晩は早よ寝ないかんとは知らん。しかし、タツミのない家へは、タツの晩は泊まるものではないと言われていた。タツミの家でしか人々は泊まらないから。
9	田之内	仏さんの正月ということで、親戚の衆はタツの夕方からミの朝方まで酒をのんでものすごくはずんでにぎやかにやる。そのうち歌も出て、ものすごく騒ぐ。親戚だけでなく、近所の人も全部泊まりこんで、にぎやかに騒ぐ。一晩中さわぐ。今頃は大層なきに、12時すぎたらすぐやらんかよと言って、かなり早く墓へ行くようになり、かなりおとなしくなった。昔は、お夜食をこしらえて食べていた。御飯、おかず、おつゆ、煮しめを作っていた。仏さんの正月であるからにぎやかにやる。
10	内野	昔は、タツの夕方から集まって夜通しおきて話をして、夜あかしをした。今はこの風はなくなった。今は昼に墓へ行く。酒を呑みながら、歌も出た。夜明け前の早朝に墓へ行く。タツの晩は、タツミをしない家は早く寝るといことは知らん。親戚衆はタツの宵から来て泊まっている。
11	大窪	タツの晩は、親戚衆が集まり、死人の思い出話などをする。酒も出し、ごちそうも出す。タツの晩は、何も無い家は、早よ寝ないかん。近所に用事があっても、なるだけタツの晩は避けて、ちがう日に行くようにした。どうしても行かないかん場合は、長居はせず、用事がすめばすぐ帰るようにした。
12	寺尾	昔は、タツの日の晩から遠方の人はその家に来て泊まっていた。泊まるというよりは、その晩は起きて夜あかしをする。最近はタツの晩から来て泊まるという仕来りほとんどなくなっているが、昔は不便であったし、必ず一晩泊まっていた。寝んとに通夜みたいな形で、朝まで起きていた。タツミのない家は、タツの晩は夜あかしなどせず、早く寝なければいけなかった。タツミのある家では夜通し起きとくから、そうでない家は早く寝なければいけなかった。普通の家は、タツミの家と区別するため、タツの晩は人を呼んだり、また他家を訪問するものではなかった。タツの晩は、よその家へ遊びに行ったり、会合を伺ったりするものではなかった。
13	西ケ市	お茶でもお酒でもよばれてタツの晩は夜明けかしをする。死んだ人のお正月じゃきに、お正月を祝ってあげる。タツの晩に親戚に寄って、そのまま寝んとに墓へ行く。タツミをしない家は、早よう寝ないかんといことは知らん。
14	青山	昔はタツの晩に来て、コタツにあたってお茶をのんで、ミの日にかけての行事であった。昔は夜あかしをしていた。タツミじゃけん、タツからミにかけて行なう。大勢の親戚の人が宵から集まっていた。
15	黒田	親戚が集まって、この夜は夜通し起きておく。タツの晩は、需ってよもやま話をする。タツの晩は夜を寝ずに、「七夜食半食べて墓へ行かないかん」という。タツミをしない家は、早よ寝ないかんとは知らん。
16	久保ヶ内	タツミのない家は、タツミの晩は早く寝ないかんという。不幸を受けとる人は、夜おそくまでおきているため、不幸を受けてない人の家では早く寝る。タツミの家では、夜は語りあかしてすぞす。酒も出る。
17	土居	昔は夜通し朝まで起きて、夜明け前に墓へ行った。今は寝んずくに、12時まわったら墓へ行く。一夜、夜通しで朝まで語り合う。タツミのない家は早よ寝ないかん。今は略式になって、12時越すことなく、夜中に墓へ行っておわるところがある。
19	秋田	タツの夕方に集まり、ミノヒになるまで、その家でおらないかん。仏さんのオトシコシじゃけん、タツの晩からミの朝にかけてそこにおらないかん。夜は寝ずに語りあかす。酒も出る。楽しい一時ではある。最近は12時すぎたら墓へ行き、お参りして、儀式をして帰る。勤めの関係などで朝までようおらんといい、みんなおまいりがすんだらその足で自分の家に帰っていた。自動車でもな帰っている。

表6 タツの晩の過ごし方(続き)

地区	タツの晩の過ごし方
20 下り付	タツの晩に親戚がようけ集まって、夜通しおきておく。タツの夕方頃に人々は集まり、夜通しおきて夜明け前、午前5時頃に墓へ行く。仏壇の前でお念仏を唱える。この時、お坊さんは来んけど拜む。タツの晩は、早よ寝ないかんとは知らん。
21 綿野	昔は夜通し起きており、夜明け前ぐらいに墓へ行って火をたき餅をあぶって食べた。タツの晩は早よ寝ないかんとは知らん。
23 大谷	親戚の人らは集まって、夜明けまで話しこむ。「タツの晩は、夜寝んもんじゃ」と昔の人は言っていた。今はちがう。
24 西谷	仏壇で念仏を唱える。この場合、坊さんは来ない。みんなが集まった段階で、仏壇の前でオツトメ(お念仏を唱えること)をする。その晩は寝ずに夜通しおきておく。普通は、夜中すぎた頃からお墓参りして帰って、少し寝る人もあるけれども、たいていは、墓からタツミの家に帰ると、また呑みなおして夜あかしをする。朝方ねむりたい人はちょっと寝る。このごろはいろいろ改善して、東の空が少し白みはじめた頃みんな行こうやといつて墓へ行くようになった。昔は、12時まわったらすぐ墓へ行った。
25 大尾	夕方親戚が集まり念仏をしていた。祭壇の前で、般若心経を申す。餅を搗いたら夜食になり、夜は寝ずにオコタにあたりながら語りあかす。夜通し起きておく。昔は、夜の12時まわればすぐ墓へ行く。このごろはもう夜が明けてから墓へ行くようになっており、時間がだんだん遅くなっている。最近では、早朝おきぬけに行った。夜中にひとねむりして、早朝おきぬけに墓へ行くようになった。タツミをしない家は早よ寝ないかんというの知らん。親戚の者が集まって楽しい一時ではある。親戚の人はタツの晩に泊まって、翌朝に帰る。朝食を食べたら解散。
26 大影	前の晩からお念仏をしたり、夜通し世間話をしたりする。楽しい一時ではある。遺族に対する、また死者に対するなぐさめの意味もある。
27 川瀬	昔は、タツからミにかけて、夜中にしよったが、このごろは略式になって、宵のうち日がぐれてするようになった。親戚衆が集まって、ここでちょっと一杯のんで、時間をつぶす。タツミのない家は、タツミの晩は早よ寝ないかんとは知らん。
28 日浦	タツの夕方に、親戚や近所の人らは来てくれる。晩に寝るものではない。12時までは寝たいかん。12時すぎたらミになるけに墓へ行く。みんな眠りもって座りよる。今の人はそのなかに念入りにしよらん。墓へは夜明け前に行く。タツミをしない家は、その晩は早よ寝ないかん。「タツミのとこは起きとんじゃけん、もう早よ寝な」と言うていた。

い家は早よ寝ないかん」、28の日浦では「タツミをしない家は、その晩は早よ寝ないかん。『タツミのとこは起きとんじゃけん、もう早よ寝な』と言うていた」という。

以上七例は、タツミと関係ない家、換言すればその年に死人を出さなかつた家は、タツの晩だけは何かあっても早く寝るべきである事を力説する点で共通する。これら七例の分布状況を図示したものが地図1であるが、旧上山村で三例、旧新瀬川村で二例、旧新宮村と旧馬立村で各一例となっており、事例数の上では旧上山村が最も多い。徳島県に隣接し東端に位置する、旧上山村に最も古風が残りやすかつたのである。だが、四つの各旧村すべてに分布する点から推せば、かつてはこれら七地区だけでなく総ての地区で同様の伝承が語られていたはずである。

さて、これら七例の中で早く寝るための根拠を示すものが四例ある。それは、5の「タツミの家は夜通しおきているから」、12の「タツミのある家では夜通し起きとくから」、16の「不幸を受けとる人は夜おそくまでおきているため」、28の「タツミのとこは起きとんじゃけん」という説明である。残りの7・11・17の三例では、これらの類の根拠が明示されなかつたが、「タツミをしない家は、タツの晩は早く寝ないかん」という伝承の言外に、このような意味を含み持たせていたものと考えられる。

中でも注目すべきは、16の「不幸を受けとる人」である。他の三例は「タツミの家」とか「タツミのある家」「タツミのとこ」という形で、死人が出た家という露骨な表現を避け、婉曲表現であるタツミを前面に押し出しているが、16では端的に「不幸を受けとる人」と説明する。尤も「不幸を受けとる人」も、死人が出た家からすれば、若干改良の跡が窺える。とにかく、タツミではない一般の家は、タツの晩だけは何かあっても早く寝なければいけなかつたのであり、これは強迫観念として人々の心を捉えて離さ



地図1 タツの晩の、普通の家の過ごし方

なかった。この晩に夜更かしをする事は、タツミとしての新仏の正月の家との同一化を意味し、そこから家人の死を連想させる。ここでは、原因と結果は平気で逆転し得るのである。死人が出たから、その年の一二月最初のタツの晩からミの朝にかけて新仏のトシコシをするのだが、これと似たような振る舞いとしての夜更かしをする事によって、死人を出してしまふという推論が働く。つまり、ここでの夜更かしは、葬式時の通夜と連動したものであり、死人を出す事を防ぎたければどうしても早く寝なければいけなかったのである。

新仏の正月としてのタツミは、二重の意味で通夜がどうしても必要であったような気がしてならない。一つは葬式としての通夜であり、もう一つはトシコシとしての通夜である。通常の正月の大晦日でも、かつては夜通し起きて初日の出を拝みに行くものであった。これは視点を替えればまさに通夜であり、一つのトシに對する葬儀でもあった。更に、婚礼の晩夜通し起きておく事や、産育儀礼におけるお七夜など通夜を連想させるものがあり、通夜は通過儀礼や年中行事等に於いて、一つの事柄の終わりと新たな事柄の始まりを画する極めて重大なケジメのための儀礼であった事が推測される。

また、新仏の正月としてのタツミであるが、「正月」の方に力点を置けば、死者霊そのものがトシガミの隠喩となり、死者を出さなかった家はトシガミの隠喩としての死者霊を祀る資格が無いのであるから、普通の正月に於ける死者を出した家と同じく、正月の神まつりをする資格が無く、喪に服するような形でその夜は何の祀りも行わず、早く寝なければならなかった。5の「タツの晩には、普通の家では夜遅くまで起きているものではない」という禁忌をはじめとする七地区の伝承は、以上の意味で、タツの晩だけは死人を出した家が主役であり、一般の家はこれを際立たせるための

脇役にすぎなかった事を如実に示すものであった。タツミが「新仏の正月」(傍点筆者)と呼ばれる所以はここにある。タツミの家のトシコシ(新仏の正月)という点に注目すれば、普通の家は皮肉にもあたかも喪に服する家の如き振舞いをしなければならなかったのであり、ここに大きな逆転現象が生じる。これこそが、タツミを「新仏の正月」たらしめている極めて大きな要因の一つと言えよう。どこかで、死体が黄金になる話と連動しているような気がしてならない。タツミの行事は、以上の意味で新仏の家だけで完結するものではなく、地域の世間全体で表裏一体となって、これを強力に支えていた点に注目しておきたい。

タツミの家に対する差別化はこれだけではない。8の中上では、「タツミのない家へは、タツの晩は泊まるものではないと言われていた。タツミの家でしか人々は泊まらないから」と言う。11の大窪では、「近所に用事があっても行かないかん場合は、長居はせず、用事がすめばすぐ帰るようにした」と言う。また、12の寺尾では「普通の家は、タツミの家と区別するため、タツの晩は人を呼んだり、また他家を訪問するものではなかった。タツの晩は、よその家へ遊びに行ったり、会合を持ったりするものではなかった」と言う。

8の場合、タツの晩の外泊が禁忌となっているが、これはタツミの家に親戚の人々が集まって来て通夜するからであり、外泊がタツミの通夜と紛らわしいためであった。もっと端的に言えば、タツの晩の外泊が新たな死人を出す事と直結すると見做されていたのである。タツの晩の自宅での夜更かしでさえ禁忌なのであるから、自宅を出ての外泊など以ての外という事であろう。タツの晩の外泊は、限りなくタツミの通夜に近いのであり、葬式時の通夜の隠喩となっていた。

11では、自宅での夜更かしでも他家への外泊でもない、他家への訪問でさえ禁忌とされる徹底ぶりであった。仮りに近所に用事があっても、なるべくタツの晩は避けて目を遠えていた。つまり、タツの晩に他家を訪問する事自体が新仏の正月を連想させるため、タブーとなる。このため、敢えてこの禁忌を侵犯すれば、訪問した家に新たな死人が出るとイメージされていたのであろう。このイメージをできるだけ払拭する意味であらうか、「どうしても行かないかん場合は、長居はせず、用事がすめばすぐ帰るようにした」のであった。タツの晩の他家訪問がいかに忌避されていたかがよく表明されている。「長居」は、タツミの家での通夜を連想させ、更にこれを原因とする新たな死人の出来を連想させるのであった。一般の家の人々は、基本的にタツの晩喪に服する人が普通の正月を迎える時の如く、何もせず早く寝て、ただひたすらに時が過ぎ去るのを待つ他はなかったのである。

12では、「タツミの家と区別するため」とその目的を明確にした上で、「タツの晩は人を呼んだり、また他家を訪問するものではなかった」と言う。人を呼ぶ場合は死人を出したタツミの家を意味し、他家を訪問するのは死者の親戚を意味する事になると見做されていたのであろう。いずれにしても、タツミとその最も根本となる葬式への連動を避ける意味で、普通の家はこの日ばかりは細心の注意を払わなければならないのである。「タツの晩は、よその家へ遊びに行ったり、会合を持ったりするものではなかった」という伝承は、古代以来の陰陽道で言う所のカンニチ(『広辞苑』では「諸事に凶であるとして外出を忌む日」と説明する。)を連想させるものがある。別稿で詳述するが、事実愛媛県東予市や桑周郡一带、さらに同県柳谷村や高知県の一部では新仏の正月のことをカンニチと呼ぶのであった。新仏の正月の裏には、相当深い歴史的背景が横たわっているのである。

さて、普通の家で、タツミの晩は早く寝なければならぬとか、外出や

外泊を忌むという伝承がある一方で、タツの晩の早寝を否定する伝承が八例ほど見られる。1・2では「タツの晩に、他家は早よ寝ないかんとは知らん」、8・20・21では「タツミの晩は早よ寝ないかんとは知らん」、10では「タツの晩は、タツミをしない家は早く寝るといふことは知らん」、13・15・25では「タツミをしない家は、早う寝ないかんといふことは知らん」、27では「タツミのない家は、タツミの晩は早よ寝ないかんとは知らん」と言う。殆ど、どの地区でも似たような言い回しであったが、この一〇地区の分布状況を地図1に纏めておいた。禁忌否定伝承は、全二八地区中一〇地区であり全体の約三六パーセントを占めるが、その分布範囲は村内全域にほぼ均等に分散しており、世代交替が進む中でタツミの家とは差別化しようとするかつての外泊や外泊のタブー、さらには自宅での夜更かしのタブーまでもが、徐々にしかも着実に広範囲で忘れられつつある事を如実に示している。このような状況下にあつて、12の寺尾の伝承は最も古風をよく留め、タツミの本来の姿をよく残していると言えよう。即ち、夜更かしの禁忌とその根拠を示し、更にタツの晩の外泊や外出の他、自宅に人を招待する事、また特定の場所で会合を持つ事の禁忌を「タツミの家と区別するため」と言う根拠を示しながら説明しており、どの事例よりも詳しく説明している。簡略化の傾向が発生する以前は、かつてはどの地区でもこのような詳細な伝承が存在していたと考えられる。

(二) タツミの家は夜通し起きる

以上の如く、前節ではタツミを行なわぬ家は自分の家から死者が出るのを恐れ、タツミの家がタツの晩に行なう「通夜」を連想させる「夜更かし」や、その親類縁者がタツミの家に行く事を連想させるタツの晩の「外

出」、更に「外泊」(タツミの関係者以外から見れば「通夜」は「外泊」に映る)などを忌避する事について詳述した。これを念頭に置きながら、その対極にあるタツミの家では、具体的にどのようにタツの晩を過ごしていたかを詳述しておきたい。両者を比較対照する事によつて、タツミの実態はより立体的に浮き彫りにされるはずである。

1の天日では、「タツの夕方には、みんな集まり、グダグダ言うて、一夜を寝ずに過ごす。お仏壇にお念仏をあげて、翌日夜が明けると同時に、まだうす暗いうちに墓へ行く。昔は、タツの晩からミの朝にかけて夜も寝ず、起きて話をしていたが、最近はみんな寝るようになった。ええかげんに寝て、朝早くおきる」と言う。タツの夕方からタツミの家が集まった客は、死者の思ひ出話や世間話などをしながら夜明け直前まで語り明かすのであるが、仏前で念仏を申すのも重要な務めであった。かつては、夜通し起きて話をするものであったが、現在は途中で仮眠をとり、早朝に墓へ行っている。「朝早く」とは具体的に何時頃か不明であるが、恐らく夜明け前後であろう。文脈から推せば、朝食前に墓地へ行き、一連の儀礼終了後タツミの家へ帰つて雑煮を加えた朝食を摂っていたはずである。それにしても、「みんな集まり、グダグダ言うて、一夜を寝ずに過ごす」という伝承は、新仏と共に極めてゆったりとした時を過ごしていた、かつての古きよき時代を髣髴とさせる。やはり、この晩は寝るものではなかったのであり、取りとめのない話ではあつても、人々は互いに目には見えない新仏と共にそこに居て、いっしょにトシを越す事自体に最大の意味があつた。

2の場岡では、「今は車が普及しているから、あまり家で泊まる人はいない。昔は、親戚の人らは必ず泊つていた。仏壇で念仏をあげることがするが、坊さんが来ることはない。親戚の人が一通り揃うと、仏壇で念仏をあげ、その後で「ちそうを出す」と言う。昔は、親戚の人々は全員必ずトシ

コシのための通夜をすべきものであったが、車の普及によって、仏前での念仏が終わり、晩に（夜中の一二時前後）出されるメインの料理を食べれば一旦自宅に帰って仮眠し、改めて翌朝墓前での行事のためにやって来る。確かに、タツミの家の人にあまり迷惑をかけないようにとの配慮がここにあったのかもしれないが、本来の主旨は新仏と共にトシコシをする事であった。これを考え合わせれば、車で自宅に帰って仮眠を取る事は、最も重要な本質を骨抜きにし、外形だけ整えたものになっている。車の普及は、人々の精神の深い部分にまで知らず知らずの内に甚大な影響を及ぼしているものであった。

夜に、念仏をあげるが、ここでは僧を呼ぶことはなかった。これは独り2だけではなく、新宮村全域で見られる現象であり、儀礼は仏前や墓前で行なわれる仏事ではあっても、寺や僧侶の関与は全く無かった。新仏の正月であり、この場合「正月」の方に重点が置かれた結果かもしれない。更にもう一つの理由は、タツミであるから文字通り日時は固定されているため、一人の僧が年内に死んだ新仏の家を同時に訪問する事は物理的に無理である。これらの理由から、仏前や墓前での行事に僧が関与しなかったであろう。

3の木風では、「餅やこはんを食べながら、夜おそくまで起きて、夜明け前に墓地へ行く。タツの晩は死んだ人の話をしながら、一二時すぎまで夜寝ずに起きていた。昔は夜通しおきていたが、今は寒い時分でもあり、ええかげんにして寝る。それでも、久しぶりに親戚が会うのでなつかしくて長話もする。一一時や一二時までには起きて話をする。寺の坊さんは来ない」と言う。ここでも、本来はタツの晩は死者の思い出話などをしながら「夜通しおきていた」のであり、その熱意が衰退すると、一一時か一二時頃までは起きているが、「寒い時分でもあり、ええかげんにして寝る」のであつ

た。但し、人々は義務感だけで起きているのではなく、久しぶりに会った親戚達と旧交を暖め合いながら、なつかしく長話に興じるのであり、楽しい一時でもあった。現在でこそ夜中の一二時前後に仮眠が挟まれるが、昔は朝まで一睡もせず徹夜状態で夜明け前に墓地へ行っていた。タツミの家では、夕食だけでなく、夜食として餅や御飯を出しており、正月のトシコシとも葬式の通夜とも俄かには判断が付き兼ねる一夜を、新仏と共に人々が朝まで過ごせるように心を砕いていたのである。

5の嵯峨野では、「タツの晩には、普通の家では夜遅くまで起きているものではない。タツミの家は夜通しおきているから。オコタを囲んで、夜更けまで死人の思い出話をしていた。昔は夜明け前ぐらゐに墓へ行く。今は略式になって、夜が明るくなってから行くように変わった。墓へ行く前に仏壇で念仏を唱え、墓でも一応みんなが念仏を申す」と言う。炬燵を囲み、眠い目をこすりながらも夜更けまで起きて死者の思い出話をするのであるが、タツミをしない家はタツミの家と差別化をはかるために、「普通の家では夜遅くまで起きているものではない」というタブーが徹底していた。この禁忌の裏には、「新仏の正月」の「新仏」という点に注目すれば、死者を出した家とは同等視されたくないという思いがあったかもしれない。また、「正月」という点に注目すれば、普通の家は新仏の正月に伴うトシコシができないので早く寝るという解釈も成り立つ。何れにしろ、タツミをしない普通の家は、タツの晩だけは早く寝る事によって、新仏の正月を行なうタツミの家を益々際立たせる結果になるのであった。

墓へ行く時刻が、昔の夜明け前から現在の夜明け後に変遷しているが、簡略化の傾向を考慮すれば、かつては炬燵を囲んで夜通し話をした後、夜明けを待ち兼ねてまだ暗いうちに墓へ行っていたのであろう。これに対し、現在は炬燵で一旦仮眠を取り、夜がすっかり明けた後に墓へ行くようにな

つたと判断できる。本来のトシコシとしての夜通し起きておく事に、そんなに大きな意味が認められなくなった結果であろう。

6の中野では、「夕ごはんの食べ始めは八く九時頃になる。酒やごちそうが出て、その日は夜通しおきて、死人の思ひ出話などをする。親戚が全員揃えば、仏壇の前でお念仏をする。その後、ごちそうをよばれて、ユタツヤストーブにあたりながら、『もうええかげんにしまいせえや』といいながらでも、一二時すぎてから墓へ行く。昔は夜寝ないものであり、オコタにあたり、夜通し死んだ人の話をするものであった。朝は日が出るよりも先に、墓の新仏さんのカドアケをした」と言う。

八く九時頃から遅い食事が始まるが、この前に仏前での念仏がある。夕方から集まりだした親戚の人々は、七時前後には全員揃い、この段階で仏前での念仏が始まり、これが終わった後に慰勞の意味で酒食が振舞われる。全員揃っての念仏の後であるから、緊張が解かれ、談笑の中から死者の思ひ出話などが、酒の力も手伝って夜通し話られるのであった。「昔は夜寝ないもの」であり、また炬燵に当たりながら「夜通し死んだ人の話をするもの」であった点は大いに注目しておきたい。現在は、「もうええかげんにしまいせえや」と言いながらでも夜更かしをし、夜中の「一二時すぎてから墓へ行」ように変わっているが、昔はずっと起きていて「朝は日が出るよりも先に、墓の新仏さんのカドアケをした」のである。一日の境目を、夜中の一二時過ぎにするのか、または夜明けにするのかで、その規準が今と昔では大きく変わっていたようである。確かに、現代の規準では時計の針が夜中の一二時を回れば一日が終了し次の日付けに変わるのだが、機械時計以前の日時計の時代では、夜明け前後が最もわかりやすい一日の境目であった。夜中一二時過ぎに墓へ行っても、まだまっ暗であり、とても「新仏さんのカドアケをした」という実感がわくものではあるまい。かつては、

「もうええかげんにしましせえや」と言って時計の針を眺めながら、夜中の一二時過ぎに行くような方便を使わず、しっかりと日の出前の薄明まで時をためていたのであった。現実問題として、本当の正月の場合、夜中の一二時過ぎに正月の年始の挨拶に来られても当惑するばかりであり、新仏に対してはヒトと同じように見做して接していたのであろう。以上の意味で、「新仏さんのカドアケ」が夜明け前の薄暗がりに行なわれる事は重要なのであった。

7の中野では、「昔は一晚泊まっていたが、最近は泊まらずに、ミの早朝に車で来て、終わればすぐ車で帰る」場合が多いという。ここではトシコシが完全に姿を消し、カドアケとしての墓前での行事に参加するためだけに早朝に訪れ、終わればすぐ車で帰る。確かに便利ではあるが、この利便さによって本来のトシコシが骨抜きにされてしまい、カドアケだけが形式的に残る。トシコシが脱落したカドアケはもはやカドアケとは言えず、単なる早朝の墓参りにすぎない。このようにして、タツミはその本質から崩壊して行くのであった。これが多少なりとも正月の年越しの面影を残すのは、墓前の門松とシメ縄、更に後に詳述するがトシダマとしての正月の餅を墓前で食べる儀礼が残されているからであった。

9の田之内では、「仏サンの正月ということ、親戚の衆はタツの夕方からミの日の朝方まで酒をのんでものすくはずんでにぎやかにやる。そのうち歌も出て、ものすく騒ぐ。親戚だけでなく、近所の人も全部泊まりこんで、賑やかに騒ぐ。一晚中騒ぐ。今頃は大層なきに、一二時すぎたらすぐやらんかよと言って、かなり早く墓へ行くようになり、かなりおとなしくなった。お夜食をこしらえて食べていた。御飯、おかず、おつゆ、煮しめを作っていた。仏さんの正月であるからにぎやかにやる」という。タツの晩の賑わいぶりが眼前に浮かぶようであるが、親戚だけでなく近所の

人々も全員夜明かしをしていた。歌までとび出すという類例は少ないが、酒好きの人々が揃えば、このような光景は他の地区に於いても当然いくらかは見られたはずである。それにしても、死者の思い出話などしながら語り明かす本来の姿からすれば、かなり掛け離れているようにも見えるが、庖丁の先に突き刺した餅を直接口で食べる事によって新仏に笑ってもらうとか喜んでもらうという徳島県一宇村の事例を考え合わせれば、そんなに逸脱したものではない。むしろ、ここでは酒宴による大騒ぎこそが、新仏に対する供養となると見做されていたのであろう。「仏さんの正月であるからにぎやかにやる」という伝承は、この辺の事を暗示している。

一晚中酒宴で大騒ぎをした結果、朝方に墓へ行くのだが、人々の高齢化によって昔の元気は既に無く、夜中の一二時過ぎに宴を切り上げて墓へ行くようになった。一日の始まりの目安となるのは、夜明けに次いで夜中の一二時過ぎとされていたようである。ここでも、6と同じく時間の短絡化が進み、「かなりおとなしく」なってしまったのである。

10の内野では、「昔は、タツの夕方から集まって夜通しおきて話をして、夜あかしをした。今はこの風はなくなつた。今は昼に墓へ行く。酒を呑みながら歌も出た。夜明け前の早朝に墓へ行く。(略)親戚衆はタツの宵から来て泊まつている」と言う。ここでも、かつてはタツの夕方から集まって夜通し起きて、夜明け前に墓へ行くべきものであった。この間、酒食が振舞われ、9と同様に歌も出て、人々は結構楽しく賑やかな一時を過ごしており、決して暗く湿っぽい雰囲気ではなかった。

墓へ行く時間の簡略化として、夜中の一二時過ぎに行く場合が多かったが、ここではもう一方の簡略化の極点とも言ふべき昼に墓参りが行なわれている。徹夜(トシコシ)後の早朝、夜明け前に行くからこそ文字通りのカドアケなのであり、新仏に対する年始の挨拶となり得る。これを半日も

後の昼に行ったのであれば、かなり間伸びした年始の挨拶になり、トシコシからカドアケに連動する緊張感は全く失なわれてしまい、殆どカドアケとは言い難い状況になってしまふ。新仏の正月に対する人々の意識も、ほぼこの程度のものに変化したのであろう。意識と行為は連動しているのであった。

11の大窪では、「タツの晩は親戚衆が集まり、死人の思い出話などをする。酒も出し、ごちそうも出す」と言う。タツの晩の死者の思い出話がいつまで語られたか不明であるが、他の事例を考え合わせれば、夜明けまで続いていたであろう事は簡単に推測し得る。「タツの晩は、何もない家は、早よ寝ないかん。近所に用事があつても、なるだけタツの晩は避けてちがう日に行くようにした。どうしても行かないかん場合は、長居はせず、用事がすめばすぐ帰るようにした」という11の伝承を考慮すれば、タツの晩は特別な日であつた事がわかる。普通の家は夜更かしも他家訪問もタブーなのであり、その一方で年内に死者出した家とその関係者だけにこのタブーの侵犯が許されていたのである。普通の家側の視点に立てば、タツの晩の夜更かしや他家訪問は死人が出る事のメタファーであり、縁起でもない事として忌避されていた。これに対し、タツミの家とその関係者側では、この晩だけは普通の家が忌避する夜更かしや他家(タツミの家)への訪問が許されており、特権を行使し得る選ばれた人々なのであつた。この辺の、価値観を正反対にする両者のせめぎあいの中で、新仏の正月は「新仏」が歳徳神に置き替えられ、タブーの侵犯に裏打ちされた多大な緊張感を伴いながら儀礼が展開されるのであつた。この緊張感とは、換言すれば神事を装つた仏事と、純粹な神事の間に生じた激しい葛藤と言えよう。

12の寺尾では、「昔は、タツの日の晩から遠方の人はその家に来て泊まつていた。泊まるというよりは、その晩は起きて夜あかしをする。最近は夕

ツの晩から来て泊まるという仕来りはほとんどなくなっているが、昔は不便であったし、必ず一晩泊まっていた。寝るとに通夜みたいな形まで（傍点筆者）起きていた。（略）タツミのある家では夜通し起きとくから、そうでない家は早く寝なければいけなかった。（略）タツの晩は、よその家へ遊びに行ったり、会合を持ったりするものではなかった」と言う。ここでは、「遠方の人」のみが泊まるように言われているが、9では「近所の人も全部泊まりこんで」夜通し賑やかに騒いでいた点を考慮すれば、ここでも多くの親戚や近所の人もタツミの家で夜明かしをしていたと考えられる。「遠方」という物理的な原因で夜明かしする（泊る）のではなく、いくら近くてもこの夜はタツミの家で「通夜みたいな形で朝まで起きて」いなければならなかったのである。端なくも「通夜」という比喻表現が示す如く、タツの晩は新仏または死者霊に対する「通夜」であった可能性は極めて高い。

確かに、肉体は息を引き取った段階で死体となり、通夜を経た後に土葬ないし火葬によって処理されて肉体から霊が分離されて新仏に変革しているが、旧一二月の最初のタツからミにかけての通夜またはトシコシによって、新仏から普通の仏に再度変革して一段階昇格するのであった。誕生後最初に正月を迎える子供に対して「初正月」を祝う如くに、新仏に対しても「初正月」が、旧一二月最初のタツからミにかけてのトシコシ、並びにミの日の夜明けに合わせたカドアケによって、祝われていたのであった。

13の西ヶ市では、「お茶でもお酒でもよばれてタツの晩は夜明かしをする。死んだ人のお正月じゃきに、お正月を祝ってあげる。タツの晩に親戚に寄って、そのまま寝るとに墓へ行く」と言う。死者のために正月を祝うという意図が前面に押し出され、とにかくタツの晩は寝ずに夜明かしをした上で墓へ行くものだという意志が明確に表明されている。お茶や酒食などは、夜明かしのための補助的なもので、それ自体が目的とはなっていない。本

来のタツミの姿勢を最も端的に言い当てた伝承と言えよう。

14の青山では、「昔はタツの晩に来て、コタツにあたってお茶をのんで、ミの日にかけての行事であった。昔は夜あかしをしていた。タツミじゃけん、タツからミにかけて行なう。大勢の親戚の人が宵から集まっていた」と言う。親戚の人々は、夕方から集まり、炬燵にあたりながら夜明かしをしていたのであり、特に何をすることもなく、ただひたすら夜明けを待っていた。

15の黒田では、「親戚が集まって、この夜は夜通し起きておく。タツの晩は、寄ってよもやま話をする。タツの晩は夜を寝ずに、『七夜食半食べて墓へ行かないかん』という」のであった。よもやま話をする事が目的のではなく、通夜またはトシコシと言われる如く夜通し起きておく事に本来の目的があった。この間、死者の思い出話をはじめ、退屈なので暇つぶしに各自の近況報告やうわさ、様々な世間話が集まった人々の口から語られていたはずである。「七夜食半食べて墓へ行く」とは少し誇張も入っているかもしれないが、夕方から翌朝の夜明け前まで語り明かすのであるから、長時間の待望感を紛らわせる意味でも、手を変え品を変えて様々な夜食を振舞う必要があったと考えられる。「七夜食半」食べる事に意味があったのではなく、ここでも寝ずに夜通し起きておく事に本来の目的があった点に注目しておきたい。

16の久保ヶ内では、「タツミの家では夜は語りあかしてすこす。酒も出る」と言う。極めて短い文章であるが、ここでも一夜の語り明かしがあり、新仏の正月を行なうための最低限のマナーが「語りあかし」であった事がわかる。タツの晩の過ごし方を説明する場合、酒食や話題など細部の枝葉末節を極限まで取り除けば、最後に「語りあかし」しか残らない。これが最も根幹の部分なのであった。「タツミのない家は、タツミの晩は早く寝ない

かんという。不幸を受けとる人は、夜おそくまでおきているため、不幸を受けてない人の家では早く寝る」という同地区の伝承を考え合わせれば、「語りあかし」は愈々際立ち、タツミの家だけに許される特権なのであった。

17の土居では、「昔は夜通し朝まで起きて、夜明け前に墓へ行った。今は寝んずくに、一二時まわったら墓へ行く。一夜、夜通しで朝まで語り合う。

(略)今は略式になって、一二時越すことなく、夜中に墓へ行っておわる」ところがある」と言う。ここでは、三段階の変遷が窺われる。一型は、最も基本的な夜明かしをして夜明け前に墓へ行く型。二型は、夜明け直前まで待つ事なく一二時まわったらず墓へ行くが、墓から帰った後は昔の通り夜明かしする型。三型は、一二時過ぎるまでも待ち切れず、その前に墓へ行き、タツミの家に再び帰る事なく、墓でそのまま解散し各々自宅に帰る型である。トシコシ・カドアケの視点に立てば、一型は最も典型的であるが、二型になれば夜中一二時過ぎのカドアケであるから一つの大きな変質が見られる。だが、墓からタツミの家に再び帰り、夜通し朝まで語り合うため、曲がりなりにもトシコシは完遂されている。トシコシの最終段階として夜明けに合わせてカドアケがなされるのではなく、トシコシの真最中に行なってしまうという変則的なものになっている。一日の始まりの起点が、夜明けから午前〇時に移行したためにこのようになったのだが、トシコシそのものは旧来通り朝まで行なわれている。新旧の二重基準が混在するため、このような結果になったのである。

三型は、トシコシもカドアケも共に旧来の様式を捨て、具体的に何時頃か不明であるが「一二時越すことなく、夜中に」墓へ行き、墓前での儀礼が済めばその場で解散するため、厳密に言えばトシコシもカドアケも成立していない。新規定で行なえば、夜中一二時過ぎまでタツミの家に居る事がトシコシとなり、その後墓へ行く事によってカドアケが成立するが、一

二時前にこれらを総て終了してしまえば、略式の新規定に照らしても形式だけで実体の伴わないものになってしまう。会社務めなどの場合、翌日の仕事の関係で、夜更かしや徹夜ができない。このような状況下では、少数派であった三型は今後益々増加し一般化するよう思われる。

19の秋田では、「タツの夕方に集まり、ミノヒになるまで、その家におらないかん。仏さんのオトシコシじゃけん、タツの晩からミの朝にかけてそこにおらないかん。夜は寝ずに語りあかす。酒も出る。楽しい一時ではある。最近は一二時すぎたら墓へ行き、お参りして、儀式をして帰る。勤めの関係などで朝までようおらんといい、みんなお参りが済んだらその足で自分の家に帰っていた。自動車でみな帰っている」と言う。タツの夕方からミの日の夜明けまで、人々は新仏の家にいき、夜も寝ず徹夜で語り明かしていたのであった。確かに酒食が振舞われ楽しい一時ではあるが、それでも徹夜で語り明かすのであるから一種の苦行でもある。更に、「新仏」のための正月であるため、歎びを共有でき心の底から笑えるような、おめでたいものでは決してなかった。一晚中呑んで歌い騒ぐ地区も二例ほどあったが、タツミは本来はしめやかな仏事であった。こんな中で、人々を徹夜に駆り立てるものは、「仏さんのオトシコシ」にあった。「タツの晩からミの朝にかけてそこにおらないかん。夜は寝ずに語りあかす」という義務感に裏打ちされた語り明かしは、新仏と共にトシコシをするという一点に集約されていたのである。赤児の初正月がヒトの仲間入りをした後の最初の大きな節目である事と同様に、タツミは新仏が初めて新仏のために特別に設定された正月を迎える事により、死者の仲間入りをした後の最初の大きな節目に遭遇する記念すべき時であった。「新仏」の「新」が取れて「仏」に変革し得る節目が、仏さんのオトシコシとしてのタツミなのである。この大切な節目に際し、親戚や近所の人々はタツミの家に集まり、新仏と

一緒に時間と空間を共有する事によって、その変革の瞬間を見届けようとしていたのである。

20の下り付では、「タツの晩に親戚がようけ集まって、夜通しおきておく。タツの夕方頃に人々は集まり、夜通しおきて、夜明け前、午前五時頃墓へ行く」と言う。21の総野でも、「昔は夜通し起きており、夜明け前ぐらいに墓へ行って火をたき餅をあぶって食べた」と言う。両者とも前述の16と同様に極めて短い内容であるが、タツの晩の過ごし方の最も大きな特徴は「夜通し起きて」いる点にあった。この条件を取り外せば、もはや新仏の正月を意味するタツミではなくなる。殆どの事例で「夜明け前」に墓へ行くという伝承が見られたが、20では具体的に「午前五時頃」と表明しているが、この時刻には大いに注目しておきたい。二〇〇三年度の場合、旧曆一二月の最初のタツミの日の出は六時五〇分頃、新曆では六時四〇分頃であり、暗闇の中を墓地に行き、墓前で火を焚いて餅を食べて行事が終わる頃、東の空がようやく白み始める段取りになっている。新仏のためのトシコシからカドアケへの舞台装置としては、自然の力を借りた最高の演出と言えよう。永い永い暗闇が明けて、新仏はようやく死後の世界で一つトシを取り、死人の面影を引きずった「新仏」からや々と普通の「仏」に生まれ変わる事ができるのである。この段階で、初めて「仏」への仲間入りが認められるのである。後に詳述するが、墓前での庖丁の先に突きさした餅を後ろ向きのまま肩越しに食べさせるといふ独特の作法は、地域によれば葬式または四十九日の時に見られる儀礼でもあった。死人の面影を引きずった部分は、この他各地の新仏の正月の様々な儀礼に散見される（例えば一升一白餅を引っぱり合って食べる事、一本箸で雑煮を食べる事など）が、この詳細については別稿に譲りたい。葬式から四十九日までの葬送儀礼が、そのまま新仏の正月に援用されている点から推せば、新仏の正月は「新仏」を

対象とした葬送儀礼であったと言っても過言ではない。「新仏」として死に、「仏」として生まれかわるのである。この節目が、タツの晩のトシコシからミの夜明け前のカドアケにかけて見られる一連のタツミ儀礼なのであった。

23の大谷では、「親戚の人らは集まって、夜明けまで話し込む。『タツの晩は、夜寝んもんじゃ』と昔の人は言っていた。今はちがう」という。具体的に今は昔と較べてどうちがうのか不明であるが、文脈から判断すれば途中で仮眠を取って早朝に墓へ行くように簡略化されたのであろう。「タツの晩は、夜寝んもんじゃ」という古老の語りは、制度として語り明かしが義務付けられていた事を示す。親戚の人々が「夜明けまで話し込む」中味は、この場の状況や雰囲気から推せば、決して冗談や軽口ではなく、専ら死人の思い出話やそれに類する事柄であり、しめやかに語られていたのであろう。

24の西谷では、「その晩は寝ずに夜通しおきておく。普通は、夜中すぎた頃からお墓参りして帰って、少し寝る人もあるけれども、たいていは墓からタツミの家に帰ると、また呑みなおして夜あかしをする。朝方ねむりた人はずっと寝る。このころはいろいろ改善して、東の空が少し白みはじめた頃みんな行くこうやといつて墓へ行くようになった。昔は一二時まわったらず墓へ行った」と言う。夜中の一二時過ぎに墓へ行く事が昔風で、夜明け頃に墓へ行く方が後の改良型と述べられているが、通夜が原則であり、夜明け前の墓参りをカドアケと称する事例を考慮すれば、ここでは二重の省略が作用していたようである。即ち、本来の夜明かしが省略されて夜中の一二時過ぎに墓参りに行くようになり、タツミの家に帰って再び呑み直し「夜あかし」をする。夜明かしそのものは、古風を留めているのだが、夜明かし後の墓参りが夜中の一二時過ぎに繰り上げられたため、本来の意味

が忘れ去られ、形だけ残ってただ意味もなく夜明けまで呑む形に変化する。目的を失った形だけの儀礼のためか、緊張感を失くして「少し寝る人」も出てくる。それでも「墓からタツミの家に帰ると、また呑みなおして夜あかしをする」だけまだ律儀と言うべきであろう。この律儀さが墮ると、「改善」の名の下に「東の空が少し白みはじめた頃」に墓へ行くのであった。ここでは明言されていないが、文脈から推せば夜中の何時間かは仮眠していたはずであり、厳密な意味での「夜あかし」にはなっていない。夕方から翌朝にかけて通夜する形だけは残しているものの、人々の意識の中では夜中の一二時過ぎに墓へ行く方が古風で、その形が崩れて夜明け頃に行く結果になったと解釈されている。

しかしこれは逆で、夕方から翌朝の夜明け前まで夜明かしをした後に墓へ行くのが元の形であり、後に夜中の一二時過ぎ（タツからミへの境目の時）に墓へ行くように変化した後に、朝を迎えるまでに仮眠が導入されたためか、本来の夜明け前に行く形が略式の如く見做されるに至ったのである。二重・三重の振れ現象を引き起こしながら、「東の空が白みはじめた頃」に墓へ行く形だけは元の意味とは違う所で結果的に残されているのであった。

25の大尾では、「夕方親戚が集まり念仏をしていた。祭壇の前で般若心経を申す。餅を搗いたら夜食になり、夜は寝ずにオコタにあたりながら語りあかす。夜通し起きておく。昔は、夜の一二時まわればすぐ墓へ行く。このごろはもう夜が明けてから墓へ行くようになっており、時間がだんだん遅くなっている。最近では、早朝おきぬけに行った。夜中にひとねわりして、早朝おきぬけに墓へ行くようになった。（略）親戚の者が集まって楽しい一時ではある。親戚の人はタツの晩に泊まって、翌朝に帰る。朝食を食べたら解散」と言う。

夕方から集まり、全員揃った段階で新仏のために仏前で般若心経を唱える。その後餅搗きが始まり、搗きたての餅を夜食として来客に振舞い、炬燵に当たりながら夜通し語り明かすのであった。ここでも24と同じく、「夜の一二時まわればすぐ墓へ行く」のが昔の姿であり、最近では略式となって「夜が明けてから墓へ行くようになっており、時間がだんだん遅くなっている」と言う。しかし、「夜は寝ずにオコタにあたりながら語りあかす。夜通し起きておく」という伝承を考え合わせれば、夜の一二時過ぎに墓へ行く事がとても昔の姿とは思えない。語り明かしや夜通し起きておく事が常態であるならば、他の多くの類例の如く夜明け直前に墓へ行く形が最もふさわしい。別稿で詳述する予定であるが、6では「昔は夜中一二時すぎには墓へは行かなかった。これは最近の傾向である」と言い、24・25とは全く逆の言及がある。さらに、9では「ミの日の朝方、墓でやる。今頃はたいそうなきに、一二時すぎたらすぐやらんかよといつて、かなり早くなりおとなしくなった。（略）昔は、オヒイサンが当たらんうちに墓へ行く。今頃は（午後）一二時まわったら墓へ行く」と言い、13では「夜中の一二時すぎに墓へ行くというのは全くない。必ずミの早朝に墓へ行く。夜が明けると前ぐらいく」と言う。また、15では「この頃の若い衆は横着になったのかどうかしらんが、晩の一二時まわったらすぐに墓へ行き、火をたいて、餅を食うて、残りを持って帰る人が多い（略）一二時こしたらもうミノヒじやと言うて行く人が多くなった」と言い、17でも「ミの朝とおに墓へ行く。昔とくらべて墓へ行く時間が早くなっている。今は一二時すぎたら墓へ行くようになってい」と言う。

これら五例は、夜中の一二時過ぎに墓へ行く事が決して本来の姿ではなく、あくまで最近の傾向であり、夜明かしが面倒になった結果略式で行なうようになった事を明らかにしている。他の殆どの事例では、現在でも夜

明け前に墓へ行き、墓前での儀礼を行ないながら夜明けを迎えるという本来の姿をよく残している。以上の諸点を総合すれば、24・25で言う夜中の一二時過ぎに墓へ行く事が昔の姿であったという伝承は、早ければ早い程古風と勘ちがいされた結果生じたものと判断し得る。本来は「夜明かし」に意味があったのであり、時を繰り上げて真夜中に墓へ行ったのであれば、新仏のためのトシコシにはならない。

25では、タツの晩の語り明かしを、「親戚の者が集まって楽しい一時ではある」と表明しているが、楽しさも一定の条件付きであり、手放して楽しんではいない点に注目しておきたい。9・10では酒食に付随して歌もとび出し、一晚中賑やかに騒ぐようであるが、多くは故人を偲びながらの語り明かしであり、親戚同志の楽しい語らいと同時に、故人に対する深い悲しみも共有する時間と空間なのであった。9・10の如き一晚中の唄い騒ぎは、単なる乱痴気騒ぎではなく、新仏と共に騒ぎ楽しみながら、この機会に大声で歌い叫ぶ事によって、深い悲しみを忘れてしまいたい、酒で洗いたいがしたいという遺族達の切なる願いが込められていたようである。

26の大影では、「前の晩からお念仏をしたり、夜通し世間話をしたりする。楽しい一時ではある。遺族に対する、また死者に対するなぐさめの意味もある」と言う。25と同様、ここでも「楽しい一時ではある」と述べ、夜通しの世間話による楽しい一時は、前の晩の「お念仏」によって留保されており、楽しさと悲しみが相半ばした複雑な状況である事を示している。タツの晩の「お念仏」が「死者に対するなぐさめ」であれば、夜通しの「世間話」は「遺族に対するなぐさめ」の意味があったのであろうか。単純には楽しめないのだが、死者にとっても遺族にとっても、タツミの夜明かしは一応のケジメの時期であった事は確かである。

27の川淵では、「昔はタツからミにかけて、夜中に（墓前での行事を）し

よったが、このごろは略式になって、宵のうち日が暮れてするようになった。親戚衆が集まって、ここでちよっと一盃のんで、時間をつぶす」と言う。ここでは、タツミの夜明かしなどは遙か大昔の話になっており、本来は略式であるはずの夜中一二時過ぎに墓前に行く事が「昔」の話になっている。現在は、夜中まで待たず、夕方に親戚衆が集まって酒食で時を過ごした後に墓へ行くのであった。これを「ちよっと一盃のんで、時間をつぶす」と言う表現に総てが象徴される如く、既にここには新仏のためのトシコシやカドアケと言った概念は無く、ただ惰性で事が運ばれているにすぎない。タツミの本質が骨抜きにされ、形骸化する過程が如実に示された典型と言えよう。

28の日浦では、「タツの夕方に、親戚や近所の人は来てくれる。晩に寝るものではない。一二時までには寝たらいかん。一二時すぎたらミになるけに墓へ行く。みんな眠りもって座りよる。今の人はそんなに念入りにしよらん。墓へは夜明け前に行く。タツミをしない家は、その晩は早よ寝ないかん。『タツミのここは起きとんじゃけん、もう早よ寝な』と言う」のであった。墓へ行く時刻が「一二時すぎ」であったり「夜明け前」であったり安定しないが、文脈から推せば本来の「夜明け前」が「一二時すぎ」に簡略化されたのであろう。「今の人はそんなに念入りにしよらん」という言及は、「夜明け前」に墓へ行く昔の風習が念頭に置かれていたものである。略式になった現在でも、人々は「眠りもって座」る程の苦行に耐えながら、夜中の一二時が過ぎるのを待ち兼ねていた。やはり、新仏のためのトシコシ・カドアケというタツミの本質がまだ少しだけ残されていたのであろう。タツの晩は「寝るものではない」というタブーの下、ただこれだけを心の支えとし、タツミの本質を殆ど忘却した人々は睡魔と戦っていたのであった。

その一方で、タツミと関係の無い家は「その晩は早よ寝ないかん。『タツミのとは起きとんじやけん、もう早よ寝な』と言う」伝承も、タツミの關係者を寝させない一つの大きな要因となっていた。普通の家は、タツミの家とは逆に夜明かしがタブーなのであり、この晩だけは何かあっても早寝が要求されていた。タツミの家に集まった人々が、もしこの晩に早く寝てしまえば普通の家との差別化を達成できず、また二重の意味でタブーを破ってしまう事になる。この背景には、新仏のためのトシコシ・カドアケが存在していたのであるが、普通の家での夜更かしのタブーが強ければ強い程、タツミの家での寝る事のタブーも相対的に強くなる。この仕掛けによって、タツミの本質が殆ど忘れられた状況にあっても、形だけは騒うじて保たれていたのであった。

以上、1、28のタツミの晩の過ごし方が明らかとなった全二五地区について詳細に検討を加えた。この結果、地区によって様々な偏差はあるものの、新仏の正月を行なうタツミの家は原則的にタツミの晩は一睡もせず念仏や死者の思い出話などをしながら語り明かし、ミの日の夜明け直前に墓へ行くという本来の姿が浮かび上がって来た。この姿は、タツミの家は夜通し起きていたので、普通の家は外出や外出先での長居はおろか夜更かしさえタブーとなっていた5・7・8・11・12・16・17・28の八例を考え合わせれば一層明確となる。

(三) タツミにおける仏前での念仏並びに僧侶の不関与

さて、タツミの晩は各地で仏前の念仏が見られたが、不思議と僧侶の影は全く見られなかった。葬式や法事と同様の仏事でありながら、僧侶は一切姿を現わさないのは誠に奇妙な現象ではあるが、この中にこそ「新仏の正

月」と言われるタツミの特異性が隠されているような気がしてならない。

1では、一夜を寝ずに過すが、この間に「お仏壇にお念仏をあげて」まだ薄暗いうちに墓へ行く。念仏をする時刻が明らかにされていないが、とにかくタツミの晩からミの日の未明にかけての時間帯で行なわれていたのは確かである。2では、「仏壇で念仏をあげることはするが、坊さんが来ることはない。親戚の人が一通り揃うと、仏壇で念仏をあげて、そのあとでごちそうを出す」、3では「寺の坊さんは来ない」、5では「墓へ行く前に仏壇で念仏を唱え、墓でも一応みんなが念仏を申す」、6では「親戚が全員揃えば、仏壇の前でお念仏をする」、20では「仏壇の前でお念仏を唱える。この時お坊さんは来んけんども拝む」、24では「仏壇で念仏を唱える。この場合坊さんは来ない。みんなが集まった段階で、仏壇の前でオツトメ（お念仏を唱えること）をする」、25では「夕方親戚が集まり念仏をしていた。祭壇の前で般若心経を申す」、26では「前の晩からお念仏をしたり、夜通し世間話をしたりする」と言う。

以上、念仏を明言するのは九地区で、全体の三二パーセントしか占めず、仏事にも関わらず意外に少ないのは驚きである。より詳細な聞き取り調査を行なえば、念仏に関する言及も聞き出せたのかも知れないが、人々の一連のタツミ観の中では「念仏」とはこの程度の重みしかなかったと言う事であろう。しかも、仏事でありながら僧侶は全く登場しない。2・3・20・24の四例では「坊さんが来ることはない」と明言までしており、残り五例も明言こそ無いものの僧侶は介在していなかったようである。

さて、仏前での念仏の時刻であるが、判明するのは全九例中五例である。この五例は二つに大別される。その一つは、2の「親戚の人が一通り揃う」時、6の「親戚が全員揃えば」、24の「みんなが集まった段階」、25の「夕方親戚が集まり」念仏をするという四例であり、これらはタツミの夕方また

ば、一見仏事のようなではあるが、仏教以前の極めて古風な死者靈祭祀とも見做し得る。速断はできないが、タツミをカンニチと呼ぶ地域が愛媛県から高知県下に分布する点を考慮すれば、限りなく陰陽道臭いのである。これら九例を分布図上に落としたものが地図2である。新宮村の東端と西端に分布し、中部の旧新宮村と旧新瀬川村には見られない。死者霊を意図的に墓地へ誘い、今は無き肉体と合体させようとする思考は、やはり相当古いものであったのではなからうか。

(千八二〇―八五〇二 福岡県飯塚市川津六八〇―四)

九州工業大学情報工学部)